

16
125
96

萬葉集古義

一
上
地

萬葉集古義

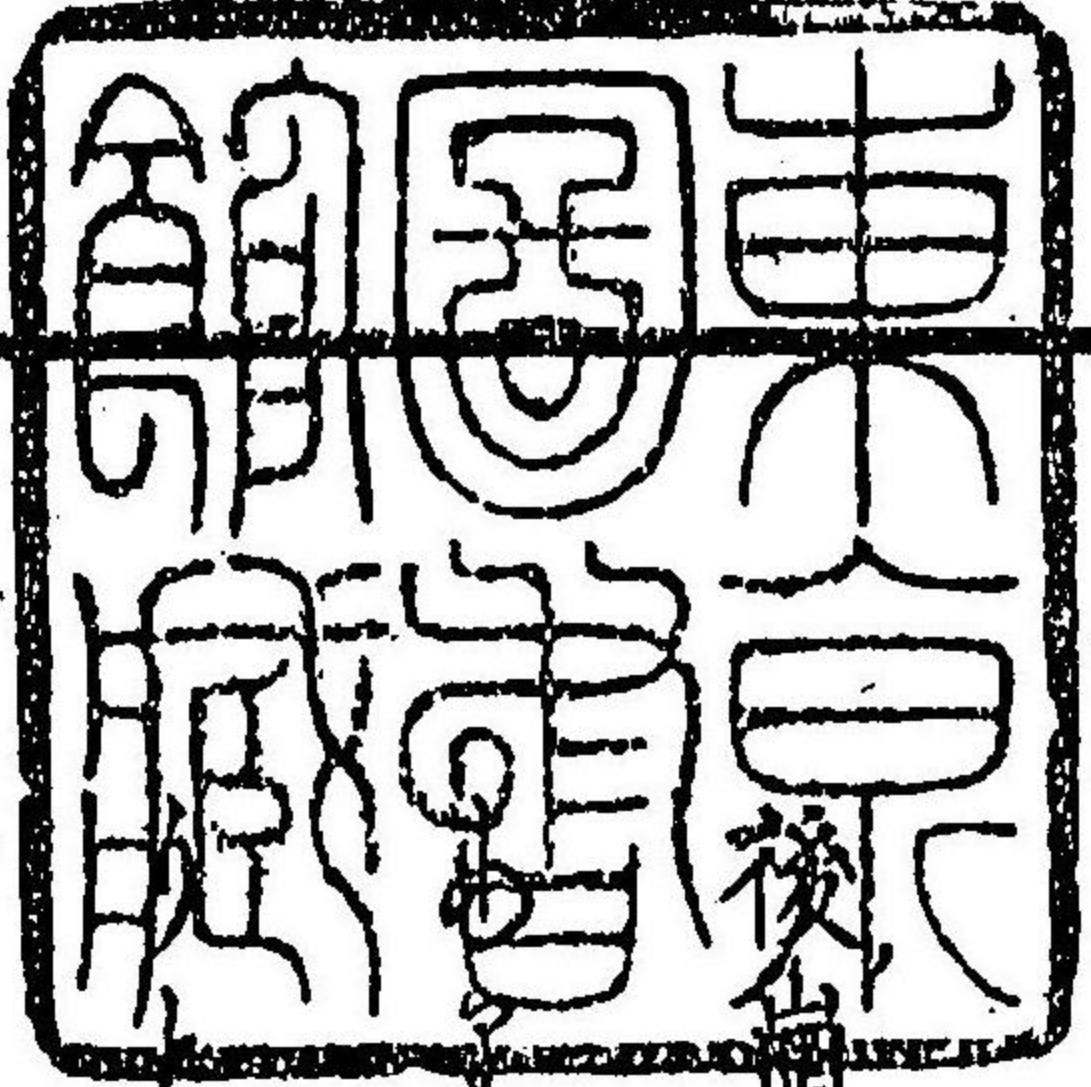
一上地

京	東
16	96
函	類門

明治十九年九月十一日内務省文部省

ノチノヲカモトノミヤニアメシタシロシタスメラミコトノミヨ

後崗本宮御宇天皇代



後崗本宮 崗字類聚抄拾穗本并袋冊ハ高市郡岡村小
子み引るふも岡と作り

て今も飛鳥岡といふかの川原宮の東北の方な
そ書紀云齊明天皇元年春正月壬申朔甲戌皇祖
母尊即天皇位於飛鳥板蓋宮云々是冬災飛鳥板蓋宮

故遷居飛鳥川原宮二年云々是歲於飛鳥岡本更定宮

地云々遂起宮室天皇乃遷号曰後飛鳥岡本宮○代の

下舊本小天豐財重日足姬天皇とありてその下小位

後即位後崗本宮と注せるハ共小最後人此志あざな

皇、拾穗本ハ、謚曰齊

明天皇と注せり

又カ、タノ、オホキミノ、ウタ

額田王歌

熨田津爾船乗世武登月待者

潮毛可奈比沼今者許藝豆菜

熨田津ニキタツ 熨、字、拾穗本は熱と作す、類聚抄ふ就と作すハ誤なり、熱と熨と書るものとハ古書ふ例多し、
三、卷ふも人乎ハ、伊豫國温泉郡の地、名なり、書紀齊明
熨見者とあり

天皇卷ふ伊豫國云々熱田津此云爾枳陀豆と有さて

爾枳ニキキとあるふよりて、枳此言清て唱べ、常此言を濁るは非なり

○船乗世武登ハ、御船ふ乗賜をむとての意なり、登

ハとての意の登なり、常の語、辭の登と異なり、きべて

古言ふハ登氏トテと云る言なり、今、京よりてあふふハ、いと多き言なり、や、古ハ延喜式鎮火祭祀詞ふ、あ、つ、ある、登との云ふ、登

これと除て古言ふあることなり、
氏テの意を具モチ多れをなり、此、下、十九、ふ、神佐備世須登云

云高殿乎高知座而云々山神乃奉御調等春部者花捕

頭持云々大御食爾仕奉等上瀬爾鷓川乎立云々又

其乎取登散和久御民毛云々又亦打山行來跡

見良武二卷十三ふ倭邊遣登佐夜深而又同妹待跡吾

立所沾おどかぞへおし。これらの登ハみな登氏の

意ふて今と同ト○月待者ハ海路くらくてはもづき

なけれバ月出てとて御舟とめさせ賜ひ待賜ふを

云これ實ふハ潮待爲賜ひなるべきを月を主と

てのまへるがとらゝきなり○潮毛可奈比宜化天皇紀ふ是

ふハ潮も満て月出ぬといふ意あり以海表之國侯海

水以來賓といへり現存六帖ハ伊勢海や潮も月いづ

るふいぬ浦人のあさこ舟ハつりお出らゝ。この毛の詞お

るときハ潮まつるものふればそかゝ。この毛の詞お

てござと月を主と。潮をかゝらと。賜へること

上ふ云るおごと。可奈比奴とハ御船出さむお叶ひ

ゝるを云。この詞お心を着て聞べ。くたく。御船

出さむお叶ふと云。でさる意ときこゆること。古人な

らでハえいふまどき詞なり○今者許藝豆菜豆、字、番

と作るハ誤なり。こハ田中。今トハ古語おさまぐおつ

道万呂考ふよりて改つ。のへる中おこ。ハ即今の今おて。まちくて其時をま

ち得さるよくなり。許藝豆菜は許藝豆卒といふおま

づハ同トきお如くきこゆれど。いほ。の意味何る辭

あり。もとへハ行奈といへバ。一向お行むと急ぎ進免

る意あり。來那といへば。一向お來むと急ぎ進免る意

あま。これめて急と緩との差別あることをとまらぬ
 べし。然るをこれらへ。率といふべきを那と云る
 古語の「格なり」といふ説ハいと異なるよし。左引る
 いふと那といふといふさ。異なるよし。左引る
 例どもを味見バ自、知らるべし。猶その差別をいふ
 あとへバ行む時、來む時などいふを。行那時、來那時と
 通し。いふべりらざるふて知べし。これ語の緩ふりて。
 急ぎ進める意なき時ふ。いふまじき言なればなり。
 こゝも其、如く。一向ふ撈てむといふを、める意な
 り。集中の例をみつぐいハば。此、下、十一、ふ。去來結手名。
 二、卷、十四、ふ。君爾因奈名、三、卷、三十、ふ。樂乎有名、四、卷、十
 六、ふ。行而早見奈、五、卷、三十、ふ。斯奈奈等思騰。又、同、伊奈
 奈等思騰、六、卷、十五、ふ。二寶比天由香名、七、卷、五、ふ。吾共
 所沾名、八、卷、五十、ふ。率所沾名、九、卷、十、ふ。家者夜良奈、十、

卷、廿六、ふ。爾寶比爾往奈、十一、四十、ふ。絶天亂名、十二、三
 丁、ふ。紐解説名、十三、廿八、ふ。懸而思名、十四、十、ふ。蘇提婆
 布利氏奈、十五、十、ふ。比利比豆由賀奈、十七、五十、ふ。美奈
 宇良波倍底奈、十九、十九、ふ。獲而奈都氣奈、廿、卷、五十、ふ。
 都刀爾通彌許奈など猶あげつくし。のあし。皆右ふい
 へる如き意味なること。おし。准へて知べし。後、世忘れ
 もらふなどよむ。奈ふ同し。但し古今集の比よ里こ
 といふ説ハくもし。りらぶ。○歌、意ハ。海路くらけ
 あり。那といふべきを。あべて率といふこと。なれ
 るハあさまし。古書をよみこし。あるときハ。率と云
 やり。あこられ。ること。おのづ。○歌、意ハ。海路くらけ
 からあることあるを。や。

れバ。月の出るを待として。御船とゞめてあるふ。月の
 ならぬ潮もみち来て。御船出せむ。時叶ひぬれば。即
 今ハとく漕出むと。月出潮こちさるをよるこび賜へ
 るなり。書紀小。齊明天皇七年春正月丁酉朔壬寅。御船
 西征。始就于海路。甲辰。御船到于大^東伯海。庚戌。御船泊于
 伊豫。熱田津。石湯行宮と見えて。外蕃の乱を志づ。免賜
 もむとて。筑紫小幸の有けるなり。此時額田
 王も御ともふて。此哥ハよみ賜あるべし
 右。檢山上。憶良大夫。類聚歌
 林曰。飛鳥岡本宮。御宇。天

皇元年己丑。九年丁酉十二
 月己巳朔壬午。天皇太后
 幸于伊豫湯宮。後岡本宮。馭
 宇。天皇七年辛酉春正月
 丁酉朔壬寅。御船西征。始就
 于海路。庚戌。御船泊于伊豫。
 熱田津。石湯行宮。天皇御
 覽。昔日猶存之物。當時忽起
 感愛之情。所以因製歌詠。爲
 之哀傷也。即此歌者。天皇

御製焉。但額田王

歌者別有四首

飛鳥岡本宮

岡字拾穂本より伊豫湯宮まで三十五岳と作り

より伊豫湯宮まで三十五

字ハ舒明天皇の時の事ニテ今齊明天皇の伊豫行幸の證小引るハさおへることなり○九年丁酉ハ十一年己亥を誤れるなり上軍王歌の左注小書記を引て十一年十二月己巳朔壬午とあると月日の支于全同きを思ふべし九年と十一年ともだ一年へおてあるのみ小て月日の支于の同トあるべきことなきともおもふべし○後岡本宮馭宇天皇

岡字拾穂本小岳馭宇同本小御と作り

の八字ハ山上大夫のくもへられ七年より下行宮までハ書記文をそのまゝ載られしる小て上小引る如し天皇御覽より下は山上大夫の詞なり○西字舊本而小誤れし古寫本小從つ○夔字拾穂本小は熟と作り○ニハ歌者此者字まゝ焉但二字拾穂本小なく○此左注の次の異説小よりて齊明天皇の大御歌とせるときは又意のをもるべし昔日こゝ小て御覽トける物の存まると見をなはして昔のことをおほく見し出して志ばし月待出るるとぶにとおろし見せども潮時小もよなされ賜ひて今ハこぞ出て筑紫の方

ふ幸しあまたむむ名残もあるが口をくとのんまへ
るなるべし御覽昔日猶存之物といふこと書紀ふも
據なけれど即位以前こゝふおはしましける事な
とも定免ぐさければそのをりのことをさしての
まへるなるべしされど左注へもべてささふくうけ
がらき事ども多ければなほ本文額田王歌とあるを
用べ

イデセル 幸_ニ于_キ紀_ユ温泉_ニ之時_ト額田王_キ作_{ヌカ}

歌ウタ

幸ハ齊明天皇紀ふ三年九月有間皇子往牟婁温湯偽
療病來讚國體勢曰終觀彼地病自蠲消クソリヌ天皇聞悅思欲
往觀四年冬十月庚戌朔甲子幸紀温湯とあり今も紀
伊國牟婁郡熊野ふ温泉ありて湯峯湯川など云とそ
○紀ハ紀伊國なりもとい紀なりしを和銅の制ふて
國郡鄉村等の名二字ふさぶめられしより韻字をそ
へて紀伊と書るなり名義ハ即水
國ふて書紀神代卷ふ見えたり

奠器圓隣之。大相土見乍湯氣。

吾瀨子之。射立爲兼五可新何

本。

奠器圓隣之。奠器。舊本ふハ英。元曆本ハ草。又一
れ。圓ハ六條本ハ圓。古本ハは。此一句ハモロノ
國と作。今ハ舊本ハのまゝを用。つ。此一句ハモロノ
と訓べ。モロトハ御室。神祇を安置奉る室と
いふなること。三卷四十丁。吾屋戸爾御諸乎立而枕邊

爾齋戸乎居六卷四十丁。三諸着鹿背山際爾七卷六十丁。

三諸就三輪山見者。又三十丁。木綿懸而祭三諸乃神佐備

而十九三十丁。春日野爾伊都久三諸乃。などあるふて

知べ。深塵秘抄。歌ハ賢木葉ハ木綿。採並。はてその神

此御室の近隣。ふは常小奠器をふき圓らしてあれば。

こ。はその義もて。奠器圓隣と書て。モロとは訓せ

あるあるべ。又思ふふ。ハ圓ハ圍。字ハ寫。誤ふて

さ。かくてこ。のモロハ。即三輪山のことなり。三

輪山と三室山といへること。二卷二十丁。三諸之神之

神須疑七卷五十丁。三毛侶之其山奈義爾。味酒三

室山九卷二十小三諸乃神能於婆勢流泊瀬河などよ

めり猶古事記も書紀も往往其例見え多りておく

来の諸注者まづ此一句を舊本小莫謂とある小據て説来れる故解得る人なしこの必しモ

口あるべく思ふよしは古事記下卷雄略天皇引田部

赤猪子小賜へる大御歌小美母呂能伊都加斯賀母登

とあるは三輪山比嚴櫃之本のことにて即此の五可

新何本も其と同しあるべけれなり又書紀垂仁天

皇卷小天照大神鎮坐磯城嚴櫃之本倭姫世記小倭國

箇歳とあるも同し三輪山のあるるの嚴櫃あるべき

とも思へ○大相土見下湯氣キ宇舊本ハ七古本ハ

ふし今ハ古業畧要集小従り見宇舊本ハ凡一本ハ

ハ兄と作王今ハ又一本小従り下宇舊本ハ凡と作

は下の誤寫なるべけれハ今改つ湯宇舊本ハ大相

謂一本小は湯と作今ハ古業畧要集小よれり

土は山の義小とて書王とおもはるれハ大相土見

下湯氣ハヤマニツウケと訓べこの一句ハ既

み○吾瀬子之子宇元晉本ハ瀬は借宇吾夫子之な

是此ハ大海皇子尊天智天皇は此時皇太子にて從

皇子尊ハ京師又は孰小ても此女王の親みおもは

賜ふ人きさしてのあまへるあるべし○射立鳥兼は

イタシケムと訓べ古事記上卷小二柱神立天浮

橋而云々訓立云多々志此集五卷廿三小奈都良須等

美多々志世利斯などあり。イハそへ言ふて、物をいひ
出さ頭小おく辭あり。此、上天皇遊獵の時の歌小委云
り。タ、シ、ハ、チの伸とよる言ふて、カ、シ、のあめめて
いふ言なり。即こ、ハ立賜ひけむといふ意小なれり
○五可新何本は、イヅカシガモトと訓べし。嚴櫃之本
なり。さて書紀引上小嚴櫃の字を書るをおもへば清
淨なる櫃といふ義あるべければ、伊豆と濁るべし。さ
てこ、小五、字をくも書るは、いゝ小そを思ふ人もあ
るべけれども、凡て借字小は、清濁か多みふまゝへ用
ふる例ありて、集中小、可豆思加を勝牡鹿まゝハ、カ

きを皮ぎ、も、又並の意は奈倍てふ詞小、苗字をあま
多とこる小書七卷三十小庭多豆水六丁を庭立水と書十
一丁小は、夕片設と夕方枉と書し、又出雲國造、神賀詞
同國風土記延喜式、神名帳かど小、大穴牟遲を大穴持
と書る類、猶多あるべし。神功皇后紀細書小、一云云々、
且重曰、吾名、向、匠、男、開、襲、大、壘、
五、御、魂、速、疾、勝、尊、也、とあるハ、嚴、御、魂、て、ふ、事、と、き、こ、え、
さ、り、さ、れ、バ、嚴、と、五、と、書、し、こ、と、も、古、よ、り、の、事、な、る、べ、
し、されど又一つ小は古事記小、伊都加斯と書るを正し
とせば異義あり。そのことは下小い多とていふべき
ついであれば、さら小云べし。○歌意は、親みおもふ
賜、夫君比、豫て三諸の嚴櫃の本小立賜はむのよし有

くなるべし。さて此度北行幸小供奉賜ふつきて、相
 別の悲しきふ夫、君を今下度髣髴小も見ましくおもは
 して、今や嚴櫃の本小立し賜ひけむろとなるそ、暫三
 諸の山見つゝ行と、自の從者等小令せ賜へるなるべ
 し。○此歌の書様謎といふも、如く小して甚く解
 王易のらぬゆゑ小諸説多けきども、共小全從の
 かまじきおのれやうく小考出つ。此歌舊説もあれ
 るやうも、もてささあけられ、今こづらひくいと解
 び、述世おいさりて、水戸侯釋小莫置國隣之の圓、字ハ
 圖とある本小從てマがゾロハと訓、曲鈎の義とて
 曲鈎ハ初月をさと一とる名なりとのさまひ、大相七
 兄凡調氣の調、字を霽の誤と、霽氣ハ二字を雲と釋
 て、オホヒナセソクモと訓、覆莫鳥雲の義と、さて未

句をイ知セリケハ、イツカシガモトと訓給へるハ
 大抵、この古學未熟の趣、強ある説、おして古意な
 らぬ、この古學未熟の趣、強ある説、おして古意な
 く、觸れ、も、う、べ、なり、け、是、岡、部、氏、考、ふ、は、莫、置、國、隣、之、
 大相古兄、或湯氣とて、キハクニ、ノ、ヤ、マ、コ、エ、テ、ユ、ケ、
 と訓、莫置國ハ無風塵と云、ハ、謂、あり、大相の字を、ヤ、マ、と
 隣ハ紀伊國なりと云、ハ、謂、あり、大相の字を、ヤ、マ、と
 訓、ハ、紀伊國なりと云、ハ、謂、あり、大相の字を、ヤ、マ、と
 海、お、助、け、直、し、て、大、相、土、見、下、湯、氣、と、し、て、ヤ、マ、コ、エ、ツ、
 ヲ、ケ、と、訓、は、さ、も、あ、る、べ、き、こ、と、な、り、て、ヤ、マ、コ、エ、ツ、
 ま、で、も、あ、ら、し、は、紀、國、の、行、幸、あ、る、ふ、紀、國、の、山、超、て、
 行、と、云、む、こ、と、い、ふ、紀、國、の、山、を、超、て、何、處、小、行、と、も、
 べ、け、む、や、無、用、説、と、い、ふ、べ、し、水、居、氏、説、小、莫、置、國、隣、之、
 ハ、カ、マ、ヤ、マ、ノ、と、訓、べ、し、莫、置、を、カ、マ、と、訓、故、ハ、古、小、人、
 の、物、云、を、制、し、て、あ、あ、ま、と、云、る、こ、と、多、く、見、ゆ、そ、れ、
 を、今、の、俗、言、お、は、や、あ、ま、と、云、る、こ、と、多、く、見、ゆ、そ、れ、
 り、い、ひ、て、莫、置、と、い、ふ、意、あ、り、國、隣、ハ、山、は、隣、國、の、坂、
 あるものなれば、かくも書べし。大相ハ山は隣國の坂
 本、字、の、誤、ハ、是、字、の、誤、謂、ハ、湯、と、あ、る、本、小、据、て、シ、モ、ハ、
 本、字、の、誤、ハ、是、字、の、誤、謂、ハ、湯、と、あ、る、本、小、据、て、シ、モ、ハ、

萬葉古義上

七

小留、坐る趣なれば、霜の深くおくころなり。吾瀬子は
天智天皇を指奉る。此時皇太子お供奉り、まへに
趣書紀小見えたり。射立爲兼、イノ知、イノ子と訓へ
五可新何木は、即寛山神社の嚴極之本なり。此女
も皇太子お従ひ奉りて行賜へる。おける。マ、マ、と訓
むとをさる。日の朝など。霜のふり、おける。マ、マ、と訓
み賜へる。さあ、り。と云。莫囂國隣を、か、マ、マ、と訓
も、さ、も、あ、る。兄、字、を、エ、の、假、字、不、用、ひ、さ、る。こ、と、も、兼、中
も、な、さ、ま、と、兄、字、を、エ、の、假、字、不、用、ひ、さ、る。こ、と、も、兼、中
も、例、な、さ、ま、と、射、立、爲、兼、を、イ、ノ、知、イ、ノ、子、と、訓、へ
も、理、へ、通、ゆ、る。不、似、と、連、も、聞、惡、く、稱、へ、舉、て、古、人、の、風、調、と
も、お、も、あ、り、て、下、へ、の、連、も、聞、惡、く、稱、へ、舉、て、古、人、の、風、調、と
の、お、も、あ、り、て、下、へ、の、連、も、聞、惡、く、稱、へ、舉、て、古、人、の、風、調、と
さ、も、あ、り、て、下、へ、の、連、も、聞、惡、く、稱、へ、舉、て、古、人、の、風、調、と
み、出、賜、は、む、や、さ、て、ま、と、嚴、極、は、上、お、云、る。ご、と、く、三、輪
山、北、あ、る。ま、の、さ、て、ま、と、嚴、極、は、上、お、云、る。ご、と、く、三、輪
て、紀、國、お、あ、り、と、せ、い、あ、る。ま、の、さ、て、ま、と、嚴、極、は、上、お、云、る。ご、と、く、三、輪
あり、ける。又、或、本、お、田、中、道、万、呂、お、説、と、て、書、入、る。お、

莫囂國隣之と、奮訓み、エ、ツ、キ、と、ある。意、ふ、て、莫囂と
謂、ハ、盡、ふ、く、ら、ぶ、れ、バ、夜、ハ、あ、づ、あ、る。意、ふ、て、莫囂と
書、る、な、り。圓、ハ、満、月、の、形、そ、の、隣、ハ、夕、月、の、意、な、り、と、い
へ、り。こ、ハ、強、て、考、へ、さ、る。説、な、る。り、へ、一、首、の、意、を、い、お
ふ、と、も、解、竟、へ、ざ、れ、バ、さ、て、お、く、べ、い、又、荒、木、田、久、老、お
病、床、謾、筆、と、い、ふ、も、の、お、云、説、と、ナ、シ、と、な、き、は、耳、无、な、り。圓
ハ、山、の、形、お、て、倭、姫、世、記、お、圓、奈、留、有、小、山、支、其、所、乎、都
不、良、止、号、支、と、見、え、あ、り、あ、る。れ、は、莫囂、圓、ハ、耳、無、山、お
り。耳、無、山、お、隣、れ、る。は、香、山、お、れ、は、莫囂、圓、隣、之、は、か、グ
マ、マ、ノ、と、訓、べ、い、大、相、土、は、續、紀、四、卷、お、相、土、建、帝、王、之
邑、と、あ、る。お、よ、る。お、大、相、土、は、續、紀、四、卷、お、相、土、建、帝、王、之
本、无、お、作、れ、バ、凡、調、の、二、字、は、霜、の、一、字、を、誤、れ、る。お、サ、の
お、て、無、霜、氣、は、さ、や、け、き、な、れ、バ、第、二、句、は、ク、ニ、サ、の
ケ、と、訓、べ、き、な、り。第、四、句、ハ、本、居、氏、お、訓、お、あ、ら
て、イ、タ、ス、ガ、子、と、よ、む、べ、い、が、子、ハ、い、さ、も、あ、ら
む、と、い、ふ、意、第、五、句、は、古、寫、の、一、本、お、五、可、期、何、本、と、あ
れ、バ、イ、ツ、カ、ア、ハ、ナ、モ、と、訓、べ、い、と、云、り。此、考、ハ、甚、め、づ
ら、い、げ、お、ハ、き、こ、ゆ、れ、ど、ま、づ、圓、ハ、山、北、形、と、云、る。こ、と、づ
る。圓、奈、留、小、山、お、尋、常、の、山、ど、も、の、形、と、ハ、異、り、て、圓、お

萬葉古義上

九十一

る由おて其所を都不良とも勢といふ意ふこそあ
 れあべての山北形の圓あらむおハ志あことく
 其所乎都不良止号支あどいふべきことあは又迦具
 山の國見といはむもあまりお打ま可せあるいひ擬
 小て古入此口氣ともおもをれむいでやそはいお
 ふ意とをさるも古語の格おひていあまきであらむとい
 よまむこといあそやかくては一首の意も通え
 かねるれば
 とおかくお
 此説も用お
 るおるらぞ

ナカチヒメ ヒコノ イマゼン
 中皇命往于紀伊温泉之時

コウタ
 御歌

中皇命命ハ女字の寫誤おて中皇女あるべし上小姿

云り其ハ上小云とる如く中皇女ハ高市岡本宮小御
 るれバかの岡本宮標中お中皇女と志る一とさるハ論
 小一さてこの皇女ハ孝徳天皇の皇后おたり賜ひと
 れバそれより後ハ間人太后と申せり故天智天皇紀
 おも間人太后薨と記されりかくても難波長柄
 豊碕宮御宇天皇代と申せり標ありてその標中お牧
 とる御歌あらむおハ御名をバ省きて太后とあ皇
 とああるしてあるべしありる小孝徳天皇ハの御代の標
 崩坐て此ハ後岡本宮御宇一齊明天皇の御代の標
 中お牧とれバ太后と申せり混ふべくなけれども
 て皇太后とハ申せり混ふべくなけれども
 お間人大后と申せり混ふべくなけれども
 不りまし御名を憚らざ記すべくなけれども
 こ小ハ難波長柄豊碕宮御宇天皇太后とあらば然る
 べきことなれどあこごとくきまややお記さむ
 ハ此集の例おあらざ故此御代の不とまで前ふ
 まお皇女おてましく一時の更名の中皇女と申せり

集ふどふり志あるに申せるふよりて此標中
ハかくあるに○伊字類聚抄拾穂本ハはふ
るふこそあらめ

君之齒母吾代毛所知武磐代

乃岡之草根乎去來結手名

君之齒母君は次の御歌ハ吾勢子とよみ給へるを見
れば御兄中大兄ふいざあはれてやははくけむはら
ばあの中大兄をさし賜へるあるべし齒ハよをひを
云次の吾代も同じ母ハ物ニを兼ていふ詞なり次句

なるも同じ君のよをひを吾はひを兼て知む

の意なり○吾代毛所知武武字舊本不哉と作るハ誤

つワガヨモシラムと訓べし○磐代は紀伊國日高郡

の地名あり○岡之草根乎草根ハクサ子と訓てあ

草の事なりハカマ子と訓てもあがえねども次の御歌

こと小詔へればハ屋背かさふつきて詔ひこハ草結の

親王の此御歌をとりて岩代のをあのかやねおとよ

ませ給ひぬればかやねと訓べしといへれど月夜と

いふハあま月のことなるふ同じ○去來結手名は去

來ハさそふ詞なり手名ハ氏牟と急ハ云るなりて牟

此半奈の畧なりといふハおろそかなり。いざぐ急この岡の草を結びてむと。二念なくおもふよくなり。さて結とハ其岡の草根を結びて。齡を契らむと爲まふあり。この結を次けて。草枕不結ぶこと。その説ハ非なり。次ハ借廬作良須云々とあるハ。旅宿をつく。王賜ふよ。あれバ。その御歌より前ハ。草枕結むむ。草及松枝など結びて。契をかくるハ古のなり。さるハ二卷。廿二小。磐代乃岸之松枝將結云々。又磐代乃野中爾立有結松云云。又後將見跡君之結有磐代乃子松之宇禮乎云々。六卷。四十小。靈尅壽者不知松之枝結情者長等曾念七卷。十五小。近江之海湖者八十何爾可君之舟泊草結兼八

卷四十小。秋草乃結之紐乎解者悲哭也。卷六十小。夜知久佐能波奈波宇都呂布等伎波奈流麻都能左要太平和禮波牟須波奈十二。廿三小。妹門去過不得而草結風吹解勿又將顧。伊勢物語ハ。わら草と人のむきバ。むと。おもひやるべし。もとへバ若き松枝などを結合せて。おきて。長久しき後。又かへり見む時まで。結びとるま。まふてあれといひて。契をかくるあり。岡部氏考ハ。松

ちぎるふいと一ければ此草ハ山管をさしてよみ賜ふあらむ。そは十二ふ山草とあるをヤマスゲと訓ふ。撮てこの草も山管の事と知べしと云るハひあまとなり。十二ふ山草とある草字は管の誤なるよりハ彼處ふいふべし。○御歌意ハ君がよをひの長きふときを考へ見べし。をも吾よをひの久しきはととも知べきハ。免でよきを此岡の草なればいざしく急結びて。長壽を契らむとのよまへるなり。

吾勢子波。借廬作良須。草無者。

小松下乃。草乎荊核。

吾勢子ハ中大兄とさしてのよまふなるべし。上小云里○借廬作良須ハ借廬ハ旅のやどりなり。前小兒道乃官子能借五百とありし同ト作良須ハ作里賜ふといふ意なり。これも上小云里○草無者ハ草ハ可也。ふて屋葺料の草といふ稱ふて薄をいふ名とふれること上小云る可如し。無者トハ草もとむとてこのかゝるこもづねありきて。もいもとの得賜をむてあらむとの意なり。されどこれハさきの御心をさぐりてかくのよまへるふて。實ハもづねよまひて勞し賜をぬるさふこなるよりのよまへるなり。○小松下乃との

こまへるハ。小松ハおひさきこもれる物なれば。その
 下ある草をふのを。あやのまもせむとてかくのこま
 へるの。まゝさらざとも。おのづから小松の下ふふさ
 はしき草なるを。見出賜ひてのこまへるふも有
 べー。○草乎。荊核ハ枕と作り。ハ草と荊せといふ。小
 根の希望辭の添里するなり。さて根の辭のそふふひ
 られて。勢を佐小轉して核といへること。上小名告沙
 根とあるところ。ふいへるが如く。さてこゝハからせ
 賜をねといふ。如く。此と本居氏のカヤナクバ云々。
 多る。一。こゝりは實ふ然そと思はるれども。薄をや
 加夜といふ所由は。前注ふことわれるごとく。ふれ

ハ。草ハ雨ッあがら加夜
とよまむそよるしき
 ○御歌意ハ。借廬ふふくべき草
 を。もしもとめかね給を。小松の下ふふさはしき草
 のおろく見ゆるを。かりてふき賜をね。さらば小松小
 あやありて。ともふおひさきも久しからむそとのこ
 まへるなり。十卷五十。小。蛭野之尾花。荊副秋芽子
 之花乎。荊核君之借廬とあるハ。趣似多る歌なり

吾欲之。子島羽見遠底深伎阿

胡根能浦乃。珠曾不拾。

吾欲之ワカホリハカねて吾見まミ不レしく思ヒひレといふなり○
 子島羽見遠コシマハミトヲ舊本コ野島波見世追ノとありて或頭シ云フ哥カ
欲子島羽見遠ヲと注シせるを今ハ擇ビ取リ用フ
つ吾欲トあるハよろしの子島ハ紀伊國名草郡和歌
らねハ舊本ニ從ツるなり子島ハ紀伊國名草郡和歌
 山城府より今道三里ばの里北小兒島と云あり今人
 家千五六百戸許ありて往來の船の泊る處なりと其
 國人云里是なるべしさてかねて見まミ不レしく思ヒひレ
 子島ハ見ルものをことをぶ小見ミあらバ思ヒひレのこも
 事ハさらみあるまじき小の意ハて次の句をのまま
 をむ下形なり野島ハ次○底深伎ハ畧解ハソコキヨ
の心を得テよことるふや意得ハふし珠のひろひ

のままハもと底の深さがゆゑなれバかくのままハ
 里○阿胡根能浦ハ日高郡塩屋浦の南ノ野島里とい
 ふありて其處の海邊を阿胡禰浦と云テ貝の多くよ
 り集ル所なりとそ○珠曾不拾拾字舊本捨と作スハ
古寫本拾穂珠ハいをゆる真珠をも又石もましれる
本等ニ從ツ珠ハいをゆる真珠をも又石もましれる
 玉をもいへり曾の辭カあり珠ひろをざる一もぢの
 とありぬ事あるまじつよく思ハせむあらめの辭な
 り不拾をヒリハ又と訓舊來これをヒロハ又例ハ十
 五十丁ノ於伎都白玉比利比豆由賀奈又十三和多都美
 能多麻伎能多麻乎伊敝都刀爾伊毛爾也良牟等比里

比等里又十四多麻能宇良能於伎都之良多麻比利敝
 禮杼又廿二伊敝豆刀爾可比乎比里布等十八七小多
 麻母比利波牟廿卷八三十小可比曾比里弊流などいづ
 れも假字書ふはかくあり十四十一丁小多麻等比呂
 ぶればあべての例波牟と見れども彼ハ東歌
 證ハあまひもい〇御歌意ハかねてみまなく思
 ひし兒島をば見しをおもひのこきことあるまじ
 き事あるふあるこの阿胡根の浦の底深くて珠のひ
 るそれねバ都人ふなふの覆もなくてあらむのこ口
 としきこととのさまへるなりさてこの御歌上二首
 と連続るふをあらざ見ゆ此ついでふ此阿胡根のあ

とりへもおはしてよませ賜へるなれ
 ばいとつふほらねられもるなるべし

右檢山上憶良大夫類聚
 歌林曰。天皇御製歌云云。

契冲此説ふらバ君が代とハ御供の皇子大臣をのこ
 まふべし。仁和のこかど。僧正遍照ふ七十。賀給ひける
 御歌ふ。君が八千代とよませ給へりといへり。但し右
 幾首となきあらハ。歌林の説ハ吾欲之の一首をさせ
 るふ

や

中大兄ナカチオホ。近江宮エノ御三山ミツヤマ御歌ミウタ

中大兄は、近江宮御宇、天智天皇のまご皇子にておは
し、まき時の御名、ナカチオホエと讀べし。中をナカチ
とよむべきよし、ハ上小云里。界解小中大兄命とある
沖も中大兄尊とある。中大兄皇子とある。大兄は皇子
べきに脱するなるべし。と云り。皆非なり。且異本等小
と申すと同ことなり。又書紀小中大兄とのみ書
て。皇子とも命ともふきハ。大兄と申すと申すと
同トき故そ。然るを聖德太子傳曆職原抄ふと申。中
大兄皇子元亨釋書小中大兄王其據は書紀孝德天皇
子ふど書るハありて後なり。卷小古人皇子を古人大兄ともふみ小多く書て古

人、大兄皇子とは連書ざるにて知べし。皇極天皇紀小
唯下とこる此

み、古人、大兄皇子とあるハ。却ていゝが小お不ゆる
ふり、又舒明天皇紀小法提郎媛生古人皇子注小更名
大兄皇子とあるも甚疑ハ。後人の書加へしもの
こそおもはるれ。孝德天皇紀小ハ古人大兄とある注
小更名古人大市私記小昔稱皇子爲大兄又稱近臣爲
皇子とあるをや。少兄也と見えざるが如し。但し集の例不て、日並皇子
尊、高市皇子尊ふとある例ふれば、こゝも中大兄尊と
あるべきものあらむとも思ふべけれど、こゝは未
皇太子小立給ハぬ間小作給へる御歌ふれば、猶もと
のま、小記せるあらむなるこの大兄の御傳ハ下小
委云べし。〇三山ハ高山カガヤマ雲根火山ウネノカミ耳梨山ミナをさき、さて

吉本後紀十三
延暦廿四年十
二月丁巳朔大

和國火香山
耳梨等山百姓
任意伐損國史
寛容不加禁制
自今以後其令
更然

これハ此三山を見まゝしてよこませる御歌ふあらむ。
下ふ引播磨風土記ふ見えざる故事を聞まゝして播磨
ふてよみ給へるなり。その故事といふハむろゝいづ
れの代ふる有けむ。此三山の相闘てなりとよめきけ
るとき。出雲國阿菩と申き大神の聞給ひて諫めてその
闘をやめしめむとて播磨國までおはしけるなりとふ。
山の闘止めと聞て乗給ひし船をうちうつぶせてそ
れふ座して本國へハかへらで播磨ふといまを給ふ。
これを三山の闘といふそれなり。○御歌の御字。舊本
脱せり。目錄ふよりて補へり。○歌下。舊本一首の二字

あり。今ハ類聚抄元曆本等ふ無ふ從つ。凡この一卷
題詞ふハ首敷を志るさびる例と見えされバなり

高山波雲根火雄男志等耳梨
與相諍競伎神代從如此爾有
良之古昔母然爾有許曾虛蟬
毛孀乎相格良思吉

高山波、高山を迦具山と云ふ用ひあるは、カウの音の
カをガ、小轉用あるなり。香山と書るも全同義なり。香
も高も共小カウの音あればなり。波ハ耳梨與とある
與の言小むるへて意得べし。あるを古來注者等ハ
山をむといふ意ハ見
あるハひびことなり。これハ山を女山と云ふは次
るよりの説なれど、カウ山ハ女山ハあらざ。
小云べし。○雲根火雄男志等。この訓は次小いふべし。
雲根火は、高市郡八木村の南一里ばあり小ありて。今
俗小慈明寺山と稱とそ、そもく此御歌舊説は皆誤な
り。故まづ初句より四句までの意をこゝ小いはむ。大
神、真潮翁説小。雲根火は女山、高山、耳梨の二ハ男山。然

て雲根火雄男志の雄は辭、男志は愛の意ふて、高山と
耳梨と、雲根火山を愛とて互小諱ふなり。且反歌の相
之時と有る、高山と耳梨山と相戦一時といふ意そと
いへり。あり見るときは高山波といへる。波の語辭、穂
小聞ゆれば、まこと小いはれるとといふべし。雲根火
を女山と云る事の證を云ふ。古事記安寧天皇條小。畝
火山之美富登とあるハ、御女陰ふて、これ女山なるハ
故なり。さるハもべて古事記書紀を考へこゝを小富
登といへるハ、大抵女陰ならぬハなきハ如くなるを
思ふべし。其、中古事記小。迦具山、神之於陰所成神とある
陰ハこホトと訓べきハ、又他小訓べきハ、やあり

る可。も。これ。を。ホト。と。訓。とき。ハ。富。登。ハ。男。女。云。
 たり。て。云。一。稱。と。も。べ。き。可。これ。一。と。つ。ふ。て。男。女。云。
 稱。ハ。陰。葛。ふ。て。其。ハ。男。陰。ふ。形。ど。り。て。い。へ。る。稱。ふ。て。云。
 ハ。陰。葛。ふ。て。其。ハ。男。陰。ふ。形。ど。り。て。い。へ。る。稱。ふ。て。云。
 する。べ。き。可。さ。ら。ハ。男。女。ふ。じ。り。て。い。ひ。稱。ふ。て。云。
 も。あ。る。べ。お。ら。む。可。ハ。一。ハ。男。女。ふ。可。あ。る。元。處。なる。
 る。稱。と。も。さ。ら。ふ。て。萬。物。女。陰。ふ。其。の。成。出。る。元。處。なる。
 が。故。ふ。入。ハ。さ。ら。ふ。て。萬。物。女。陰。ふ。其。の。成。出。る。元。處。なる。
 と。そ。の。も。と。ふ。可。き。ゆ。え。あ。る。こ。と。あ。り。て。あ。や。ま。く。つ。
 しが。さ。ら。か。く。心。動。せ。ら。る。ハ。故。ふ。そ。の。も。と。男。女。云。
 日。さ。ら。一。稱。なる。可。お。の。づ。可。ら。女。お。か。ざ。り。て。い。ふ。稱。
 の。ご。と。く。陰。ふ。心。動。せ。し。より。こ。と。お。こ。り。て。つ。ひ。ふ。二。
 山。の。御。女。陰。ふ。心。動。せ。し。より。こ。と。お。こ。り。て。つ。ひ。ふ。二。
 山。の。會。戰。ハ。あ。り。し。な。れ。ど。あ。ど。一。國。な。ど。の。如。く。さ。ま。
 で。物。を。あ。ら。さ。し。あ。さ。ま。し。く。い。ひ。さ。り。こ。と。の。め。な。然。
 き。ハ。神。代。よ。り。の。み。や。び。て。ぶ。り。な。り。と。あ。る。べ。し。
 る。ふ。か。の。翁。説。ふ。男。志。を。愛。の。意。そ。と。い。へ。る。は。な。不。俗。
 意。なり。愛。を。古。半。思。と。云。る。例。ふ。き。こ。と。ふ。至。孝。德。天。皇。
 紀。ハ。大。臣。謂。長。子。興。志。曰。汝。愛。身。乎。と。あ。る。は。ヲ。

シキとよめる言のうへめてハ惜意なり。故按ふるハ男
 愛字の本義はあらむ混ふことなる可。
 は。曳。字。を。寫。誤。れ。る。もの。ふ。そ。あ。り。け。む。さ。ら。バ。ウ。子。に。
 ヲ。エ。シ。ト。と。訓。べ。し。曳。字。を。エ。の。假。字。ふ。用。ひ。曳。志。は。善。
 一。なり。善。を。曳。と。云。る。こ。と。集。中。ふ。も。書。紀。ふ。も。あ。れ。ら。
 れ。例。あり。又。吉。野。を。も。古。は。延。斯。努。と。い。ひ。こ。と。又。住。
 吉。日。吉。な。ど。い。ふ。類。を。も。考。合。べ。し。さ。て。こ。は。畝。火。を。
 善。一。と。愛。憐。む。なり。愛。憐。は。善。一。と。も。る。事。の。最。一。あ。れ。
 ば。や。あ。て。曳。志。と。の。み。云。て。愛。憐。む。意。ふ。な。れ。り。さ。れ。ば。
 古。事。記。上。卷。ハ。阿。那。邇。夜。志。愛。衰。登。古。衰。と。あ。る。も。延。を。
 躰。ふ。可。愛。男。と。の。ま。ま。へ。る。な。里。即。書。紀。ふ。は。妍。哉。可。愛。

萬葉古義上

古今集非諧
耳あーの山の
くちな一えて
一あ思ひの
色のあこめ
ふせむ
東遊草
天神山
あり

少男歎とあるふて志るべし。又古事記中卷神武天皇
大御歌ふ加都賀都母伊夜佐岐陀呂流延袁斯麻加牟
とある延も可愛の意なるを思ふべし。等ハとしての意
なり。○耳梨與ハ耳梨ハ大和志小。在十市郡水原村上
方四面田野孤峯森然山中柅樹多矣。因又呼柅子山と
あり。與ハ與共小の意なり。○相諍競伎ハ雲根火を得
むとして高山と耳梨と相共ふあれさきふと諍ふよ
なり。伎ハさきふありしことを今かこるてふをとな
り。○神代從神代といふハ大あさ上古をひろくさ
ていふ辭なり。人代ふむあへていふ神代ハあらざ

るハ即あの播磨風土記ふ見えさる。故事の有し時
をさき從とあるハ。今をじまりあるふハあらざるよ
しを宣へるなり。○如此爾有良之ハカクナルラシと
六言ふ訓るよろし。如此とさし給へるハ。今の人の孀
あらずふ事をさし給へるなり。それを神代へあへ
て。今新ふをじまれるふハあらざ。神代よりしてかや
うふあるらしとなり。良之ハ大あさよりあふハ志ら
れねど。大概その事の察知るしをいふ辭なり。今の俗
ナといふ。○古昔母伊爾之閑とハ往方といふよて。今
ふ同。○より以往をひろくさき詞なり。母ハ現在ふむあへ

古今集辨諧
耳梨の山の
くらな一えて
一のふ思ひの
色のおこそめ
ふせむ
東遊草
天神山 耳梨山
あり

少男歟とあるふて志るべし。又古事記中卷神武天皇
大御歌ふ。加都賀都母伊夜佐岐陀豆流延袁斯麻加牟。
とある延も可愛の意なるを思ふべし。等ハとしての意
なり。○耳梨與ハ耳梨ハ大和志ふ。在十市郡水原村上
方。四面田野。孤峯森然。山中柁樹多矣。因又呼柁子山と
あり。與ハ與共ふの意なり。○相諍競伎ハ雲根火を得
むとて。高山と耳梨と相共ふわれさきふと諍ふよ
なり。伎ハさきふありしことを今かゝるてふをえな
り。○神代從神代といふハ大い上古をいらくさ
ていふ辭なり。人代ふむるへていふ神代ふハあらざ

るハ即ちの播磨風土記に見えたる。故事の有し時
をさき。從とあるハ。今をどまりあるふハあらざると
しを宣へるなり。○如此爾有良之ハカクナルヲシと
六言ふ訓るよろし。如此とさし給へるハ。今の人の孀
あらそふ事をさし給へるなり。それを神代へるへ
て。今新ふをどまれるふハあらざ。神代よりしてかや
うふあるらしとなり。良之ハ大いさるのふハ志ら
れねど。大概その事の察知るをいふ辭なり。今の俗
ナといふ。○古昔母伊爾之閑とハ往方といふよて。今
ふ同。より以往をいらくさき詞なり。母ハ現在ふむるへ

るなり○然爾有許會ハシカナレコソと六言ふ訓る
宜し然トハさやうふといふ意なりナレハニアレの
約まれるなりナレコソハナレバコソの意なりこれ
を畧けるありとおもふところ古言ハハ婆ハあく
ても其意ふ聞えとることふてもとより有べきもの
を畧きとるかくさまふいへること古言ふ例多し上
ふハ今の世のありさまをもて如此とのさまいこ
ふハ古昔の事をさして然トハのさまへるなり許會
ハ上ふ注るが如しこの辭一首の眼なりこゝろをつ
けて聞べし上ふハ良之とおしをありて宜ひこゝろ
ハ許會と決めて宜へるなり神代のもろよりかや

うのことハあるならいふてあるらさやうふあれ
バこそ現在の身もとつゞく意なり○虚蟬毛ハ現在
の身もといふが如し毛ハ古昔ふむるへてのさまふ
なりさて虚蟬ハ集中借字ハ空蟬とも打背見とも
又假字ハ齋膳宇都會臣宇都世美おどかけりさて
こハ顯身てふこととはされもいのかもひよれる
事ふて實ふ其義なることハ論を待ぎて明らかなり
然るを文字ハ右ふ載る如く種々ふ書あれども宇都
思美と書るハ一ツもあくて皆宇都會美宇都世美との
み書れば宇都世宇都會ハ宇都思の思の語を轉る

るふいあらでいさゝの意味ある語なるべし。も一宇
都^ツ思^シの思^シを轉^レり多^クとせむふハ。宇^ツ都^ツ思^シ伎^キま多^ク宇^ツ都^ツ
思^シ伊^イ波^ハ比^ヒま^マ宇^ツ都^ツ思^シ情^コ宇^ツ都^ツ之^シ真^マ子^コなどいふ宇^ツ都^ツ思^シ
と^トも。宇^ツ都^ツ世^セと^トる宇^ツ都^ツ曾^ソといひあるべし。あるべき小
志^シのいへるも。只^シ空^ク一^ク貝^ヰてふことふハあらで。空^ク石^セ花^ハ貝^ヰ
といへるも。只^シ空^ク一^ク貝^ヰてふことふハあらで。詞^ジの思^シと曾^ソ
てふことなれば別^ヘなり。そのうへる詞^ジの思^シと曾^ソ
世^セとハ通^ト一^ク言^ハる古^コ證^シをも見^ミ及^ビばざることなればか
ふかくふ直^チふ顯^{ケン}一^ク身^ミてふ意^イふハあらとそ思^シふさ
れど其^キ義^ギハ末^マ思^シ得^トむ。古^コ事^ジ記^キふ。雄^ユ畧^{リョク}天^{テン}皇^スの葛^カ木^キ山^{サン}ふ

て一言主大神の御ありさまを顯^{ケン}一^ク見^ミ賜^ミひての
りもまふ大御詞^{オホミコトコト}ふ。恐^{コソ}我^ガ大神^{オホカミ}有^{アル}宇^ツ都^ツ志^シ意^イ美^ミ者^{シヤ}不^フ覺^カ白^{ハク}
而^{シテ}云^フ々^々とある。この宇^ツ都^ツ志^シ意^イ美^ミハ現^{ゲン}大^{ダイ}身^ミと聞^クえて。大
神^{オホカミ}を敬^{ウヤ}ひて詔^{ミコトコト}ふことハふはゆれど。そのもとハ宇^ツ
都^ツ曾^ソ身^ミと云^フと一^クの別^ヘ。宇^ツ都^ツ志^シ意^イ美^ミを切^キれば。宇^ツ都^ツ曾^ソ
美^ミとふれ。ばなま^マ。志^シ意^イの切^キ曾^ソ。猶^{ナカ}考^{カウ}べし。〇孀^{ソウ}乎^フ。三^{サン}言^{ゴン}一^{イツ}句^ク
なり。此^{コノ}ハ七^{シチ}言^{ゴン}の位^イの句^クを三^{サン}言^{ゴン}ふ詔^{ミコトコト}へるなり。此^{コノ}格^{カク}の
例^{レイ}ハ余^{ヨリ}の永^{エイ}言^{ゴン}格^{カク}ふ委^イ云^フ。彼^{カノ}書^{シヤ}ふ就^スて考^{カウ}べし。さて孀^{ソウ}
とハ。夫^{ツレ}よりも婦^{メノ}よりもいふ稱^{ナリ}なり。集^{シユ}中^{チュウ}小^コ例^{レイ}多^クし。〇
相^{アハ}格^{カク}良^ラ思^シ吉^{キキ}。格^{カク}宗^{ソウ}。舊^{キウ}本^{ホン}小^コ格^{カク}。類^{レイ}聚^{シュ}抄^{セウ}小^コ格^{カク}と作^{サセ}るハあり
元^{ゲン}番^{バン}本^{ホン}官^{カン}本^{ホン}等^{トウ}小^コ從^{ジュウ}つ。字^ジ彙^ヱ小^コ格^{カク}。格^{カク}擊^{キキ}也^ヤ。聞^ク

也と相格をアラソフと訓は、二卷小相競、十卷小相爭
 あり。相格をアラソフと訓處、小皆相字をそへて書見。カタラ
 など。アラソフと訓處、小皆相字をそへて書見。カタラ
 フといふ小相語とかけると同例なり。又格字を用ひ
 一ハ、十六詞書、小有二壯士、共訛此娘、而捐生格競と書
 里、良思ハ上小いへるの如し。吉ハ今世小伊といふ小
 同ト。今、俗小ラシイと良思吉とつゞきするハ、書紀推
 古天皇、大御歌、於朋枳彌能、菟伽破須羅志、枳とある
 をはドめてかゝる小見えり。さてこの吉は、上の
 然爾有許曾を結めあり。許曾といひて吉とせらむる
 例、天智天皇紀、童謡、阿喻舉曾播施麻倍母曳岐、仁德

天皇紀、皇后御歌、虚吕望虚曾赴多弊茂豫者、集中十
 一廿九、小難波人葦火燎屋之酢、四手雖有己妻社常目
 頰次吉、又四十、最今社戀者爲便無寸、又四十、加敝良末
 爾君社吾爾、枳領巾之白濱浪乃、緑時毛無十二、小玉
 釧卷宿妹、母有者許曾夜之長毛、歡有倍吉、十七、小
 野乎比吕美久佐、許曾之既吉、などある此等、その例な
 り。又許曾と云て良思吉と結めするハ、六卷、四十、小諾
 石社見人、每爾語、嗣徳家良思吉とあり。中昔小、結めと
 る例あり。古本枕草紙、小紅のハ、月夜こそ悪き、榮花物
 語、小さやうの事こそかきるべき、落窪物語、小志られ
 奉らんこそくさるべきとのさまへ、今昔物語、小行着
 で道ふてこそ落申べきあり、又るげふ日記

ふ。あびかさふりけるをあやしきふど。もるともふこ
 そ。こらひてき。大鏡小。宣旨かうふらせ給ひて。あるき
 給ひしあまさまこそ。落居てもおなえ侍らざりき。衆
 塵秘抄口傳集小。土佐守盛長が甲斐へ具してまうり
 るりしふ。あらひよりしをこそ。おや申候きあど
 もみゆ。猶多あるべし。今ハ姑記得ある耳と舉つ。○御
 歌意ハ。播磨おはしまして。かの阿菩大神のとま
 り給ひし處ふて。三山のあらそひの事をかふしいで
 られ。神代以來さる例ある故小。今人も孺とあらそふ
 ならし。まわれべ今人のおとなしからぬふしもあら
 ざいふしへよりのあらひふこそあれと。今人つまあ
 らそひさるをあらぬことおおわしめせるふ。その大
 古よりまじまれることお御心つきて。今までの御疑

ををるけ給い
 しよしなり

反歌

高山カガヤマ與耳梨山ミナヤマ與相之時アヒトキ立見タチミ

爾來之ニコレシ伊奈美イナミ國波良クニハラ

相之時アヒトキは高山カガヤマと耳梨山ミナヤマとふたつの雄山ヲヤマの共トモふ畝火ウケヒ
 の雌山メヤマを得トクむとて。會戰アヒタカヒし時の義トキノギなり。これコレを嗚山ウヤマと
 耳梨ミナと婚ムス合カヒし

時とをるハ、いとく齟齬るこ書紀神功皇后卷小烏智
 と上小委辨あるごとく。箇多能阿邏々麼菟麼邏麼菟麼邏珥和多利喻祇氏菟
 區喻彌珥末利椰塢多具陪宇摩比等破于摩譬苦奴知
 野伊徒姑播茂伊徒姑奴池伊裝阿波那和例波。會去來將
 者な又多摩岐波屨于池能阿層餓波羅濃知波異佐誤
 阿例椰伊裝阿波那和例波。上小これら會戰ことを會
 とのみ云る證なりけり。毛詩小肆伐大商會朝清明と
 といへり。かかれバから國小て。注小會朝會戰之且也
 也。會戰ことを會とのこも云り。○立見爾來之ハ立と
 ハかの阿菩大神の出雲國を立てといふなり。見爾來
 之とハ大和國小いとりて見むとて來給ひいといふ

實ハ多ク見そなえさむとてふハあらざ三山の相闘
 と諫免むとて上來給ひいといふとみまへるなり。
 見との單小見ることのこみ非。さてこの印南まで來
 たり給をぞりて。そこふとままり給ひいといふと。おなよそふ
 のさまへるなり。播磨風土記小出雲國阿菩大神聞大
 和國畝火香山耳梨三山相闘以此欲諫山上來之時到
 於此處乃聞闘止覆其所乘之船而坐之故号神集之覆
 形とあるハ則その故事なり。今も播磨國鹿子川の西
 におさて此御歌もその故事を聞坐て播磨國ふて作る

まへるなり○伊奈美國波良波良拾穂本伊奈美伊奈美の和
名抄小播磨國印南伊奈美郡とあり是地なり續紀廿六
賀古郡印南野とあり此野ハ印南郡より小播磨國
賀古郡伊奈美も渉れる地なるべしといへり
十五小稻日野又二十稻見乃海四卷十六小稻日都麻
浦箕乎過而六卷十七小神龜三年幸於播磨國印南野
時云々稻日野能大海乃原笑古事記中卷景行天皇條
小天皇娶針間之伊那毘能大郎女云々などありて古
より伊奈美とも伊奈毗とも云ふなり國と云ふハ
初瀬國難波國吉野國などいへる類ふて一郡一郷を
も國といへり原の事は上小云ふさてかくよこそて

ままひて印南の形狀いふありともことこりまま
まざるが中々小御餘意ふうくかぎりなくて後人の
かけても及奉らるべききはふいあらざり○御歌
意ハ雲根火の女山を得むとてかぐ山耳梨山の相戦
し時ふその戦を諫免むとてこざく出雲國を立て阿
菩大神のおをりゝぶそのあらそひやえぬときこ
めしてとまらせ賜ひし印南國ハこゝそとのままへ
るなり○此三山の相戦の事を甚く異みて山の焼く
と相戦ふなをらへていひなせしものそなどいふな
るハ例の理を主とせる徒の言そ近く長尾謙信の越

後國春日山の城内ふて、大石の戦ひて碎け散ると云
ことも聞傳れば、まゝして上古ふへさる事、常有けむ

とや

渡津海乃。豊旗雲爾。伊理比沙

之。今夜月夜清明已曾。

渡津海は、借海神の御名と綿津見神と申す。それより
轉じて海をいふ。古事記傳ふ委くいへり。さればこゝ
ふ海とかけ

るハ、あハ見の假字なり。さるを後、人海ハうこの義
と心得て、こゝつりこといふハ、非なりとあるベシ。
豊旗雲は、豊ハ稱辭として、豊御酒、豊祝、豊葦原、豊秋津洲、
豊泊瀬などの豊のごとく、大くゆさるかさちを
もくへていへるなり。旗雲は、旗の靡有如く、棚引ある
雲と云。道晃親王御本ハ、旗雲、古語、海雲、映
夕月、赤色似旗也。と注し給へ玉。文徳天皇、實
録ふ。天安二年六月庚子、有白雲竟天。自良耳坤。時人謂
之旗雲。同八月丁未、是夜有雲竟天。自良至坤。人謂之旗
雲とあり。但し彼は時人のことさらふ志の呼なせし
物ふて、今は多し十四ふ。由布佐禮婆美夜麻乎左良奴
爾努具母能。布雲之
なり。とある類ふいひなり。賜るなり。懐

藤大津皇子詩云月ヲ
〇伊理比沙之 古寫本不稱と
瀬谷 雲旗張嶺前
仙覺 由阿可本不稱と
入日 指なり豊旗雲不入
ある よし云り皆不ろし
 日さしてこよひの月のさやならむことをかねて
今入日の さきを見ておぼせら
れある ふらあらざ混レべら
ツキ ヨと讀べし古言ふハ月夜を都伎欲と
は いをむ都ツク ヨとのみいへり
十五十八丁 由布豆
久欲 廿卷五十七丁不
都 久欲と假ッ きて月夜ハ多ッ 月をいふ後々は月夜ハ
字書 あり
 月の夜てふことのみみせれど古ハ然ふあらざ古今
集 夕月夜刺や岡邊の云々とあれば彼頃までも
夕 月夜といひしことありしむこそ又月夜よし

夜よしとよめるもあづ月よしといへりところ聞え
 多れ〇清明已曾ハキヨクテリユソと訓べし清明を
ケク といふハア きて明字ふてもテリとはよむべきこ
古言 ふあらざ
 とふれども集中不皆照字をのみ用あるを思へばこ
 こも明ハ照の誤寫不そ有べき思とゆと草書甚混易
 ければな里或説 不明ハ有字の誤ふてキヨクア
リ コソあるべしと云るハああらざ清照
 とつゞけある例ハ四卷四十 不月 讀之光者清雖照有
三 不野 邊副清照月夜可聞ハ卷四十 不雨 晴而清
テリ 有此月夜十卷十 不暮 三伏一向夜不穢照良武高松
ノ 野雨などあり已曾ハ希望辭なりいりて今夜の月

さやのふわれのりと希望給ふなり。故集中ふ多く乞

欲などの字を書きいと多き詞なり。又社與具あど

義未詳あらど。但し衆求二卷中。前漢朱買臣云々買臣

乞其夫錢令華注。與亦曰乞とあり。これふて見れば

與乞彼方ぬても通用ある字ふてありけむ。さてこの

已曾といふ詞。上古のイ勢物語。秋風吹と雁小告已

さきこえどもま。伊勢物語。已曾と訛とさり。催

勢とあるのこなり。それ己曾と訛と訛と訛と訛と訛と

馬樂ふもい。で吾駒はさてこ。とテレ。コソと訓べき

やくゆき已勢とあり。さてこ。とテレ。コソと訓べき

のとも思へど。五卷十九丁。小。伊母爾都岐許會ふどある

なる今は五卷。十八丁。小。知良須阿利許會十卷。丁。小。爾

保比與廿卷。廿六丁。小。伊母爾都岐許會ふどある

ソ。ニ。ホ。ヘ。コ。ソ。ツ。ダ。コ。例。小。据。テ。リ。コ。ソ。と。訓。つ。御

歌意ハ此風景おもしろき海濱ふりて。今夜の月見む

とおもふ時しも。入日の空ふ心なく雲の棚引よかく

てハこよひの月もさやのならとをいあでかの入日

の影のこころよくてりて。雲もはれゆき。今夜の月

もさやのふ有のりと作坐るなり。又こよひこよより。

御船ふめし給えむの御心ありて。いふく月のさやけ

からむことをねがひ給へるふも有べし。畧解の説は

夫木集ふ。法性寺入道關白。入日さき。崇徳院御製。入日さ

きふてこよひの月ハ空ふ知ふき。崇徳院御製。入日さ

き。豊旗雲ふわき。高間の山の峯のもこちハ

○

此御歌ハ三山の反歌ふありざることいふふ及ばざれど同レ度此印南の海邊ふてよませ給ふふ

右一首歌。今案不似反歌也。但舊本以此歌載於反歌。故今猶載此歟。亦紀曰。天皇先四年乙巳。立為皇太子。天皇重日足姬。天皇先四年乙巳。立為皇太子。

也但も拾穂本ふ然依と作歌載の下ふ茲字ありて。於反以下ふ○此歟元曆本古寫本等ふハ此次と作カケ○先四年とハ皇極天皇の四年なり。此年乙巳ふあり。先とハこの齊明天皇代の標下ふ先の事を引くるふ故先後まざれどふさめなり。皇極天皇卷ふ四年六月丁酉朔庚戌讓位於輕皇子立中大兄フ為皇太子ト見えふり○為天皇為字元曆本

小无此三字中大兄ふ改べレ

近江大津宮御宇天皇代

ア
フ
ミ
ノ
オ
ホ
ツ
ノ
ミ
ヤ
ニ
ア
タ
ノ
シ
タ
シ
ロ
シ
メ
シ
メ
ス
メ
ラ
ミ
コ
ト
ノ
ミ
ヨ

近江大津宮は志賀郡小あり。後紀小延曆十三年十一月丁丑詔曰云々。近江國滋賀郡古津者先帝舊都。今接輦下可追昔號改稱大津云々と見ゆ。即今も大津と呼り。書紀天智天皇卷初小天命開別天皇息長足日廣額天皇太子也。母曰天豐財重日足姬。天皇天豐財重日足姬天皇四年讓位於天萬豐日。天皇立天皇為皇太子。天萬豐日。天皇後五年十月崩。明年皇祖母尊即天皇位。七年七月丁巳崩云々。是月云々皇太子遷居于長津宮云云。同卷小六年三月辛酉朔己卯遷都于近江。十年十二月癸亥朔乙丑天皇崩于近江宮。癸酉殯于新宮とあり。

御陵ハ山城國山科小あり。諸陵式小山科陵近江大津宮御宇天

智天皇在山城國宇治郡北城東と見ゆ。續紀小文武天皇西十四町南北十四町陵戸六烟

皇三年冬十月甲午詔赦天下有罪者云々。為欲營造越

智山科ニ山陵也とあり。○代の下舊本等小天命開別

天皇とあるハ後人志己ざる事既く云るが如し。

類聚抄古寫本拾穂本等ハ謚曰天智天皇と云。注あり。但一智と古寫本ハ知と作るはわる。スメラミコトノミコノリレテウチノオホマツキニフダハラノアソミニアラソ

天皇詔内大臣藤原朝臣競

憐春山萬花之艶秋山千葉

之彩時額田王以歌判之歌

内大臣藤原朝臣は大織冠鎌足公なり内大臣ハウチ

ハオホマヘツキこと訓べしまづ内とは内事を親志

統領するよりの稱ふして下ハ引續紀の建内宿禰と

内能阿曾と云ると同義なり古事記書紀の歌ハ見ゆ

即建内と云も建ハ其武勇まじきと稱ふれば實ハ

内宿禰稱ふて内事を親しくあづかり領するゆゑの名な

り續紀文武天皇詔ハ難波大官御宇掛母畏支天皇命

乃汝父藤原大臣乃仕奉賈流狀乎婆建内宿禰命乃仕

奉賈流事止同事叙止勅而治賜慈賜賈利とある藤原

大臣ハ即録足公ふて内臣とまじく建内宿禰の

仕奉里賜へる小同ト事そと又藤原朝臣仲麻呂と内

詔へる意なるを併考べし

相と云も同トこゝろバえなり續紀ハ實字元年五

原朝臣仲麻呂為紫微内相と見えあり但しこの内相

と云ことハ唐鑑徳宗紀ハ陸贄在翰林為帝所親信居

艱難中雖有宰相大小之事帝必與贄謀之故當時謂之

内相とある小よられさること小て内と云ることハ

此方の古ハ自こゝろバえ通へりさて又古ハ百濟國を

内官家と云ふことハ又内官外官ハ内人ト云ふある

も又續紀宣命ハ兵まゝ内都奴あど云ることハ見

えあるも各其大小の差別こそあれ内と云る意ハ皆

相通かくて此ハ實ハ内臣ありけるを下小書紀を

引る如く天智天皇八年十月此卿の今はのきはふ大
臣位と藤原氏とを授へるを前ふめぐらして書紀ハ
も此集ふも九て極官ふよりて内大臣と志るされも
るなり但し書紀の中ハ天智天皇三年の條と同七年

大鏡裏書
 内大臣十二人
 事十一人
 中臣録子連藤原良繼同魚名
 同高藤同兼道
 同道隆同道兼
 同伊周同公季
 同頼通同教通

あるされたるものふりて、其餘はみふ前へめぐらして、極官をあるされたり。即藤原とあるされたるものふりて、さて續紀ふ。元正天皇養老五年十一月戊戌詔曰。凡家有沉痾大小不安卒發事故汝卿房前當作内臣計會内外准勅施行輔翼帝業永寧國家とあるハ。鎌足公の内大臣ふらへ給へるふり。又同紀ふ。寶龜八年九月丙寅内大臣從二位勳四等藤原朝臣良繼薨云々。寶龜二年自中納言拜内臣賜職封一千戸專政得志外降自由八年任内大臣。まゝ寶龜九年三月丙子内臣從二位藤原魚名改爲忠臣。十年正月壬寅朔以忠臣從二位藤原朝臣魚名爲内大臣。など大臣をオホマへツキ。こと申せことハ此も見えたり。大臣をオホマへツキ。こと申せことハ此下御製歌小物部乃大臣とある是あり。麻弊都伎美ハ景行天皇紀ふ。到筑紫後國御木居於高田行宮時。有僵

樹長九百七十丈焉。百寮踏其樹而往來。時人歌曰。阿佐志毛能彌概能佐烏麼志。魔幣菟耆彌伊和多羅秀暮彌。開能佐烏麼志と見え。て前津公の義なり。天皇の前小候ふ公てふこと小て。近臣のことなり。常小群臣をマ訓も。前津公等といふ。又和名抄小。本朝式職負令云。太ことあるを思ふべし。又和名抄小。本朝式職負令云。太政大臣於保萬豆利古止乃於保萬豆岐美。左右大臣於保伊萬宇智岐美と見え。古今集などふも。大臣を於保伊麻宇智岐美とある。この萬豆岐美も。萬宇智岐美も。麻弊都伎美の訛畧り。はる後の音便小類れふどるものあり。和名抄小。侍從於毛止比止萬知。藤原朝臣

萬葉古義上

百六

は書紀小。天武天皇三年小。八姓を命。十三年冬十月小。五十二氏小姓を朝臣と賜ふと見ゆ。藤原もその隨一なり。但録足、公在世の初ハ、中臣、連ふりしりど。元ふ。如くなれバ。さて皇極天皇、紀小。三年正月乙亥朔。此小もかくあり。さて皇極天皇、紀小。三年正月乙亥朔。以中臣、鎌子、連拜神祇伯。再三固辭不就。稱疾退居三嶋。于時輕皇子、患脚不朝。中臣、鎌子、連曾善於輕皇子。故詣彼宮。而將侍宿。輕皇子深識中臣、鎌子、連之意氣高逸。容止難犯。敬重特異。中臣、鎌子、連便感所遇。而語舍人曰。殊奉恩澤過前。所望誰能不使王天下。耶。舍人便以所語陳於皇子。皇子大悅。中臣、鎌子、連為人忠正。有匡濟心。乃憤

蘇我臣入鹿失君臣長幼之序。挾關闢社稷之權。歷試接王宗之中。而求可立功名。哲王便附於心中。大兄云々。四年六月丁酉朔甲辰。遂陳欲斬入鹿之謀。戊申。中臣、鎌子、連知蘇我入鹿。臣為人多疑。晝夜持劍而教俳優。方便令解云々。佐伯、連子麻呂。稚犬養。連綱田。斬入鹿。臣孝德天皇。紀初小。天豐財重日足。姬天皇。四年六月庚戌。天皇思欲傳位於中大兄。而詔曰。云々。中大兄退語於中臣、鎌子、連。中臣、鎌子、連議曰。古人。大兄殿下之兄也。輕皇子殿下之舅也。且立舅。以答民望。不亦可乎。云々。是日。以大錦冠授中臣、鎌子、連。為內臣。增封若干戶。云々。中臣、鎌子、連懷

至忠之誠，據宰臣之勢，處官司之上，故進退廢置計從事。
立云々。白雉五年正月戊申朔壬子，以紫冠授中臣鎌足，
連增封若干戶。天智天皇，紀小三年十月乙亥朔戊寅，是
日中臣內臣云々。七年五月五日，天皇縱獵於蒲生野，于
時大皇弟諸王內臣及群臣皆悉從焉。八年五月戊寅朔
壬午，天皇縱獵於山科野，大皇弟藤原內大臣及群臣皆
悉從焉。八月云々。是秋霹靂於藤原內大臣家，十月丙午
朔乙卯，天皇幸藤原內大臣家，親問所患而憂悴極甚，乃
詔曰云々。庚申，天皇遣東宮大皇弟於藤原內大臣家，授
大織冠與大臣位，仍賜姓為藤原氏。自此以後，通曰藤原。

大臣，辛酉，藤原內大臣薨。碑曰春秋五十有六而薨甲子，天皇幸藤原
內大臣家，命大錦上蘇我赤兄臣奉宣恩詔，仍賜金香鑪。
甲子の上十一月三續紀小天平寶字元年閏八月壬戌
字脫もるなるべし紫微內相藤原朝臣仲麻呂等言云々。尋古記，淡海，大津，
宮御宇，皇帝云々。于時功田一百町，賜臣曾祖藤原內大
臣，褒勵壹匡，字內之績也。云々。不絕傳，至于今云々。今有山
階寺維摩會者，是內大臣之所起也。云々。伏願以此功田，
永施其寺，助維摩會，彌令興隆云々。姓氏錄，左京神別小
藤原朝臣，出自津速寬，命三世孫，天兒屋根，命也。二十三
也。孫內大臣大織冠中臣連鎌足，古記曰，鎌足云々。天命

開別、天皇八年、賜藤原氏男正一位、贈太政大臣不比等。
天淳中原瀧真人、天皇十三年、賜朝臣姓、と見ゆ。さてか
く官氏姓のみを擧て名を書さざるは、きべて此、集小
ハ、大納言以上、小は名とあり、ざる例あり。三、卷
四、十、小、大納言巨勢朝臣、廿、卷、十、小、大納言藤原朝臣、又
五、十、丹相藤原朝臣、ふど有類多し。さて二、卷、一、十、十、此、
七、十、丹相藤原朝臣、ふど有類多し。さて二、卷、一、十、十、此、
同代の標内、小、此、卿を丹大臣藤原卿とあれば、こゝも
卿とあるべきこと、おも思はるれど、ふは、小、あ
ら、さ、る、ハ、十、七、十、三、小、天平十八年正月云々、於時左大
臣橘卿、諸兄公云々、賜酒肆宴、勅曰、汝諸王卿等、聊賦此、

雪、各奏其詞、左大臣橘宿禰應詔歌云々、十八、十、小、太
上皇御在於難波宮之時、歌七首、左大臣橘宿禰歌云々、右
件、歌者、在於左大臣橘卿之宅、肆宴御歌、並奏歌也、十九
四、十、小、天平勝寶四年十一月八日、在於左大臣橘朝臣、
三、十、小、肆宴歌四首云々、右一首、左大臣橘卿、
宅、肆宴歌四首云々、右一首、左大臣橘卿、
へる、故、小、かく、一、章、の、詞、の、中、小、ま、ら、卿、と、も、宿、禰、ま
か、く、あり、
と朝臣とも交へ書れば、もとより、志の彼此、小、書、
り、かく、さま、小、同、人、を、卿、と、も、朝、臣、ま、宿、禰、と、も、書
る、例、猶、多、し、其、ハ、三、卷、十、六、小、石上、乙麻呂、朝臣とある
を、六、卷、三、十、小、石上、乙麻呂、卿、四、卷、十、六、小、大伴宿奈麻

呂宿禰とあるを。又同卷五十四小。大伴宿奈麻呂卿。二卷

十二小。大伴宿禰安麻呂卿のことなり。とあるを。四卷十八小は。

大伴卿と書るふどなり。ふ不このとぐひいと多可れどわづらをもければことぐ

くひいそぞ。今はつうを採出ていふのみそ。然るを岡部氏考小。こり小藤原朝臣とあるを。此集の例ふもが

へりとて。藤原卿と推て改めり。○この題詞の意中々の物ぞこおひあるあざそり。

は内大臣小勅して。春山の花のいろと。秋山のもみち

の小ほひと。いづれまさると人々ふあらしめ給

ふ時。額田王秋山のまされるよを判断せ給へる歌

ふり。こへ拾遺集九卷小。ある所小春秋いづれあまさ

ると。はせ給ひける小作て奉りける。紀貫之春秋小

思亂れて別不得カチつ時ツ不就ツつ。移る心ハ。又元良親王

兼香殿のととこ小春秋いづれあ増ると。ひ侍ハけれ

バ。秋そきあ。う侍るといひければ。おも。るき櫻を。

これはいあがといひて侍りければ。大方の秋小心は

寄。のど花見る時ハ何れともあ。し。題あらど。作者不

知。春は唯花の一重小咲を。り物の憐。は秋そ勝れる。

新古今集春上小。祐子内親王藤壺小住侍ける小。女は

らうへひとあど。さるべきかざり物あ。りして。春秋

のあ。れいづれあ。心ひくあど。あらしひ侍りける

小。人々あ。り秋小心をよせ侍りければ菅原孝標女孝標女

あさ緑花もつ小霞みつ小朧小見ゆる春夜の月更科日記

ふハ春秋の事ふどいひて云々いづれふ御心とさ
まると問ふ秋の夜ふ心をよせてこさ給ふささの
みかふとさまふはいととてあさ緑云々とこさへ
さればあへさうち調りてさハ秋の夜ハあさ
てつるふハさあこよひより後の命のふも秋ふこ
さハ春の夜とさあみとさおもむといふ秋ふこ
るよせもる人々ハ皆春ふ心をよせつたりこれのみ
やみむ秋の夜の月とさあふいみより真ト思ひあづ
らひけるけしきふてもるこふどふもむあさより
春秋のさざめはえし侍らざるをこのかうあさ
あさせ賜ひけむ御心ども思源氏物語薄雲ふをさづ
ふおゆる侍らむあさとあり
くさあさの子ぞこハさるものふて年のうちゆきあ
える時々花紅葉空のけしきふつけても心の行こ
とふ志侍里ふあさ春の花のをや秋の野のさあ

りをあむむあさよりとりぐ小人あささひ侍里ける
そのころのげふと心よるをありあさハさるさあめ
こそ侍らざるあれもるこふハ春の花の錦ふあさ
のなるといひをへるめりやまとことの葉ふハ秋の
あそれをとりさて思へるいづれも時々ふつけて
見給ふ小目うつりて得こそ花鳥の色をも音をもこ
さまへ侍らねせばき垣根の内ありともそのをま
の心見あるをあり春の花の木をもうあささ秋の
草をもりうつりていさづらふる野邊の虫をもさ
ませて人小御覧せさせむと思給ふるをいづれあさ

の御心よせ侍るべらむときこそ給ふふいと聞え
 おくきことゝおせどむげふさえて御いらへきこ
 えざらむもうさてあればまうていゝ思ひとき侍
 らむげふいつとあきあふあやとときとゆふへ
 じそをのありきえ給ひふし露のよそがふも思ふま
 へられぬべけれとあどけあげふの給ひけつもの
 らりあげふるふえあのひ給をできこもさへ哀をの
 をせ人あれむ吾身ふあむる秋の夕風野分ふ春秋の
 あらそひふ昔より秋ふ心よきる人へかぎまさりけ
 るを若菜ふ女へ春をあをれむとふるき人のいひお

き侍りけるげふさあむ侍りけるなつものくもの
 とのゆるることへ春の夕暮こそことふ侍りけれと
 申給へいなるこのさごめよいふへより人のとき
 のねふることと末の世ふくづれる人のえあきらめ
 をつまづくこそ云々
契冲代正記ふ彼源氏物語抄ふ
樹下集を引て云あのとよぬ
 大伴くろぬしらぶ論議の歌豊主とふおもりの
 欠でさきことをくらぶる春と秋といづれまさ
 れるくるぬしことふ春はるば花こそはちれ野邊ご
 とおにしきをまれる秋ハ増れり又謙徳公いまご宰
 相中將のとき應和三年七月二日のきんあち春秋
 の歌合のことあり秋のあさより花もこつもちを
 もみつ虫の音も聲々おやく秋を増れる一條禪問小
 夜のねさのふ云唐國ふはかやく春を愛し我國の人
 ハ昔より秋ふ心をよきるあふべしされハ光源氏も
 我身ふあむる秋の夕風とあふめ給へり萬葉集より

代々の歌ふも、此二のあらそひ、未いづれと、走らさし、霞の空に花鳥のいまのうらう色あること、このき時の不こらしき心なれば、秋のうれふどある類ふ一のこそ、老の夕ハげふ忍ぶとく侍る。ふどある類ふて、古昔より春秋をあらそふことありと見え

ある。今の判歌をそ、そのえじめといふべき

冬木成。春去來者。不喧有之。鳥

毛來鳴奴。不開有之。花毛佐家

禮杼山乎茂。入而毛不取。草深

執手母不見。秋山乃木葉乎見

而者。黃葉乎婆。取而曾思。奴布

青乎者。置而曾歎。久曾許之。恨

之。秋山吾者。

冬木成、成字は盛の皿の畫を省きて書るふや、集中悉、冬木成と書れば誤字ハあらト、と高橋正元云々

此説ふよるべし。かゝる字畫を省くは、漢國の書ども小韻を勻と書掃を帚とかき、蛇を它と書ふぐひいと多有ホカル小本ヨリて、但レかレこのは、古文小畫を加へし省もしあるを。御國小古より便宜小まのせて、畫を省きて作りとおもひれて、古書等小健を建とかき、蜈蚣を吳公と作、弦を玄と作、此等古事石ノ寸ヲ主ノ類古事記記レ見レゆ、村を寸と作、醜を鬼と作、枳を只とレのき、伎を支と作、倭を委とレのき、國の類、波を皮とレのき、倍を喜とレのき、趾を止とレのき、これら古記集中等逸を免と作る橋、免勢と作るこふレ見レゆ、性靈集レ見レゆ、いと多レ、等由氣官儀式帳レ衣若于令、袴若于要、あど多くレかレけるも、領腰の省畫なレ、又元亨釋書

小境を竟と作り、かくてこの一句は、春といをむ料のみな省畫なり。枕詞レて、集中レいと多レ、さて木成コモリ、隱など書レるハ共小借字レて、生氣ニケモリ崩と云なるべし、フエハ恩頼ニケル、フエかど云フエレて、物の利生レるを云言なるべし、劔名小本つるぎ末ふゆと云ふ、古事記、歌小見レえレるも、フエハ一物レを切レて、數々レふふやを謂コトの名小て、今のフエレと言レと見レゆ、氣ハ音の親レ通レふま、小古コと轉カッ云レり、モリハ物の初レて、崩レをといふ言なり、霍公鳥の初音レもらきなどいふ、其意なるべし、さて春小至レれば、萬物の生氣ニケを崩モリきゆレる、この枕詞ハ有なるべし、岡部氏考、

萬物内の隠るて、春を得てはり出るより。此詞ハあり
と云るハ、人皆然と思ふことふれど、例の理なきある説
みて古意ハあらざ、但古今集貫之、歌ハ冬隠里思ひ
のけぬを木の間に花と見ると、雪を降けると見
えて、その頃より後ハ、冬の氣の存小隠る意ハとりて
多くよめり。此ハ彼、宇都世の美て、古言と蟬、脱のこ
おもひてよめり。此ハ彼、宇都世の美て、古言と蟬、脱のこ
裏の違有ること、ふそあり、抑彼集の此ハ下里てハ、表
世中の諸の事、のや、轉變する、古語の本意を
失へること、少ある、ね、ゆ、め、後、を、古、の、證
と、を、る、こ、と、あ、る、れ、又、荒、木、田、久、老、説、小、フ、ユ、キ、ナ、ス、と
訓て、古事記、歌ハ、布由紀、須加良賀志、多紀とあるハ、
冬木成枯之、下木なるべし、さば同義とをべし。さて
春ふつと、冬隠春乃大野乎、十卷六丁、冬隠春去來之
又十三丁、冬隠春乃大野乎、十卷六丁、冬隠春去來之
ハ、決、け、れ、ば、こ、の、説、さ、て、志、の、ら、ば、布、由、許、母、留、と、こ、そ、い

ふべきを、理とくも云るハ、いひ絶て、次を歌ふ語のつ
の體ふて、安見斯志大皇、鯨魚等利海とつづくると同
格なり。○春去來者ハ、春ふあればといふ意なり。凡て
春されば、秋されば、朝されば、夕されば、あど云ハ、春
有バ、秋有バ、朝有バ、夕有バ、てふ辭の切、里ある
みて、爾來との切サとあれり、十卷七丁、春去、四卷五
十二丁、十七丁、あど、阿、里、佐、利、底、と、云、る、詞、の、あ
るも、有、有、て、といふ詞の切、里あるふて、同例と聞
ゆるの中、廿卷、三丁、於、保、伎、美、能、美、許、等、爾、作、例、波
云々、神樂歌ハ、いふ、あ、の、不、と、よ、め、る、そ、正、之、阿、例、婆

といふべきを切めて、佐例婆といへる例とは聞えあ
 る。しるれば集中小、春去者、春避者あど書るハ皆借字
 ぶて、春之在者と書るそ實なりける。十、卷六丁、春之
云、まゝ十三丁、春之在者、伯勞鳥之、草具、吉云々、まゝ云
三丁、春之在者、酢、輕成、野之云々、などあり、あゝるを去
と字、意と心得て、時々刻々、こゝの眼前と さて之在者と
去、ゆくが故ぞ、と思ふハ後、世心なり。
 伸る時ハ、その之ハ例の力、ある助辭なれば、あゝの小
 その時小なりとるよゝと、下ぞおおもくおもをせ
 する意を含めり。○不喧有之ハ、冬ハ鳴ぞ有くなり、冬
 よりまぢくこゝる此詞小こもれり。○鳥毛來鳴奴と
 ハ、奴ハ已成の奴ぶて、冬ハ鳴ぞ有く鳥もなやく來鳴

て、春の憐むべき時小なりぬるをいふ。○不開有之ハ、
 冬ハ開ぞ有くなり、上の不喧有之小同ド。○花毛佐家
 禮杼ハ、花も咲て有どもといふなり、花も咲て有、雖然
 といふが如し、禮の言小心を付べし。多、さけど、輕
より、上の奴の辭ぶてらしておもふべし、をやく鳥も
 來鳴てあり、花も咲て有、志かれどもといふなり、以上
 六句ハ、春の方人の、春のをぐれて賞あることをいひ
 かつるを、とがめする意なり、以下四句ハ、秋の方人、秋
 のまされるよゝをいをもとて、春をいひおとをあり、
 さてかく春をいひおとさむとて、雖といひゆるなり

○山乎茂は山が茂さ小の意なり。岡部氏考も畧茂ハ解もあらし。

木の茂きをいふ。山小入て鳥音を聞むときれど。木茂

くて聞て賞あさきを云○入而毛不取は。高橋正元云。

畧解小取は見字の誤ふて。こズあらむといへれど

も。不喧有之鳥毛來鳴奴と有小對へ見れば。取は聞字

の誤ふて。キカズあるべしといへり。大神景井云。取は

聽字の誤あるべし。砂と取と草書よく似る事といへ

り。是然るべし。こハ鳥毛來鳴奴といふ小對へていへ

り○草深ハ草が深さ小の意なり。上ふ木の茂をいへ

る小むあへて云。花を折とらむときれど。草深くて

とり得がさきを云○執手母不見ハトリテモこズと

訓べし。畧解ハタラリテモこズとよめるハ強多と

とは書ぬこハ花毛佐家禮杼といへる小對へていへ

り。以上春山ハさまぐあをれなれど。なるその春のあ

のぬ所あるをよこまへるなり。次以下ハ秋山の事

ふりつるなり○黄葉乎婆は。モこツヲバと訓べし。毛

美は色の緋きを想いふ稱なり。さて毛美知毛美都と

いふ知都の辭は清べし。例ハ古言清濁考ハ委し。さてその知都の

辭ハその緋くある貞をいふ語なり。瀧を多藝知多藝

都よる濕と比豆知比豆都といふ小同ト概して曉べ

岡部氏考ふ。紫葉ハ紫出の畧語として、言痛きまで
あげつらへれども強説ふり、その意ハ清濁
のあひさへあるをや、知都ハその形貞をいふ語な
れバ、必清むべき理なるを、濁までのみ唱るハ後世の
誤ナリ。乎婆ハ、其物ととりあげえらびて云辭なり。さら
ぬをばいゝのふもせむと委ね任する意あり。○取而曾
思奴布ハ、折取てそ賞愛むと云意なり。春山ハさまぐ
あそれなれど、なるあぬ所ありて心ゆるざりしを。
黄葉の頃ハ、草木もあれて入、やそくて、心のまゝ、ふ錦
と見ゆる枝を折、取て、愛翫ぶとなり。畧解ハ、思奴布ハ
るは例のおそむく思奴布てふ辭ハ、古言ふくさぐふ
るそあり。用ひ多れば、其ところふよりて、其意ものえり、其中

ふ、戀慕ふ意なると、賞愛む意なると、堪忍る意なると、
密隠るゝ意あると、四種の異あることハ、もやく此、上
ふ辨へざり、こゝは賞愛むと云るなり、其例ハ七、卷三
丁、ふ、墨吉之岸爾家欲得奥爾邊爾縁白浪見乍將思十
七、三十、ふ、布勢能宇美能意枳都之良奈美安利我欲比
六、丁、伊夜登偲能波爾見都追思努播牟又、四十、曾己乎之毛
安夜爾登母志美之怒比都追安蘇夫佐香理乎云々、十
八、十八、ふ、百鳥能來居且奈久許惠春佐禮婆伎吉能可
奈之母伊豆禮乎可和枳且之努波無云々、又、十九、由具
澈奈久安里和多流登毛保等登藝須奈枳之和多良婆

可久夜思努波牟十九十五耳爾聞眼爾視其等爾宇
知歎之奈要宇良夫禮之努此都追有争波之爾云々又
十六トシ年爾來喧毛能由惠霍公鳥聞婆之努波久不相
日乎於保美又十九ホト霍公鳥云々里響鳴渡禮騰母尚之
奴波由又廿安里我欲比見都追思努波米此布勢能海
乎共卷十四ヤ八千種爾久佐奇乎宇惠豆等伎其等爾
左加牟波奈乎之見都追思努波奈又四十ア安治佐為能
夜敞佐久其等久夜都與爾乎伊麻世和我勢故美都々
思努波牟これら皆眼前ハ賞愛むをいへるなり又許
布流といふ言も常ハ彼處のもの此處ふて戀慕

ふを云ど三卷四十石竹之其花爾毛我朝旦手取持
而不戀日將無とある類ハ眼前ハ賞るをいひて今
之奴布と意をえ同トなる許布流てふ言の事ハ下
いふべしこの差別ケガあることを辨め置ざしてハまど
ふことありてつひハ古言の意を解得ること難ハか
又岡部氏考ハ古歌ハ花など小對ひてとと思ふ
と云ハ散を惜むハはあらで見るハ愛る事なる
意同トといへるはよハ古をハてふ辭ハ惜む意
小のみ云て愛る意ハ云るハらつてあるハり
飲明天皇紀ハ閻將問河邊臣曰汝命ハ與婦孰與尤愛
とあるハ訓のりへハ混ハふハはバヲシキハ愛字の意
はあらで惜の意なりハ混ハふハはバヲシキハ愛字の意
とあるハ既ハ上ハふハいへり
きいふ○置而會歎久ハ枝ハおきて打もとらむ

てそ歎くといふなり。歎くとへると長息の約れる詞
 みて、歡レしき事おも悲しき事おも。其時ふあふりて長
 息をつくさいふ。此ハその既く黄葉しあるをバ折と
 して賞愛ミ。いまふ黄葉せぬをバそのまゝふおきて。
 もこちしてあらバ折とらむと。黄葉せむ時を待てな
 げくなり○曾許レ之恨シ之曾許レとハ。上の四句をさそ。之
 ハ例のその「もぢなるよ」を重く思をもる助辭な
 り。恨は、怜字の誤そと本居氏云。かくてオモシロシ
 とよまれぬれども。タヌシとよまむそ此處ハ照應
 ある。そは三卷三十。讚酒歌。世間之遊道爾怜者本

誤る。醉哭為爾可有良師とある。怜をタヌシとよめる
 不同アキ。○秋山吾者ハ。山の下。官本六條本
 よりもまさりて。吾ハあえれと思ふそとのこゝろな
 り。これおてまさしく。秋のまされるよゝを判コト定め
 たるなり。曾字ある本等ハ從ハ。何クニ怜國會の曾不同ト。
 吾ハ秋山ハあえれなるそとの意なり。○歌意ハ春山
 のかよもさまぐをさうくはあれど。うら枯る秋ハ山
 小入やまければ。吾ハ秋山の黄葉ハ心ひあるそと。
 多そや免の情をもて
 ことこり給へるなり

額田王。下近江國時作歌

額田王云々ハ。天智天皇紀ハ。六年三月辛酉朔己卯遷都于近江とあれど、それよりハ前ハゆるゑありて、近江國ハ下りさまへるゑとのことなるべし。作歌の下、舊本ハ井戸王即和歌の六字あり、そは例ふるべしへれば今改めて、下の綜麻形の云々の歌の上ハ收つ

味酒。三輪乃山。青丹吉。奈良能

山乃山際伊隱萬代道隈伊積
流萬代爾委曲毛見管行武雄
數數毛見放武八萬雄情無雲
乃隱障倍之也

味酒ハ枕詞なり、崇神天皇紀、歌ハ宇磨佐開瀨和能等能云々、此集四卷ハ味酒呼三輪之祝我云々などあり

り味は味美と賛る辭なり酒と云名の意ハ佐加延
 の切れるゐて切ケの是を飲めば心意も面色も榮ゆ
 る謂ありと云里さて三輪とつづく意ハ供神酒と
 美和といふよ里美酒之神酒てふ意少かくいつづけ
 多り神酒を美和といへるハ書紀崇神天皇卷舒明天
 皇卷少神酒和名抄少日本紀私記云神酒和語云美和
 集中二卷三十三小哭澤之神社爾三輪須惠雖禱祈十三
 丁小五十串立神酒座奉神主部之土佐國風土記小神
 河訓三輪河源出北山之中届于伊與國水清故爲大神
 釀酒也用此河水故爲河名神酒河のなどあり冠辭考
 の説の

非あるよとつみ出てこゝ味酒呼三輪あど酒乎と
 味酒乎神名火山之四卷味酒呼三輪あど酒乎と
 てかみなびとつと畧きて三輪あど酒乎と
 一あてその釀と畧きて三輪あど酒乎と
 つたけりありとあるハ味酒乎三輪あど酒乎と
 く泥めは處女等之袖振山と處女等乎と通は
 一云るは處女等之袖振山と處女等乎と通は
 める類あて猶そのめことは下あつ然て措を畧きて
 と考見バ明らからあはるべしれハ措を畧きて
 三とつバけらとあはるべしれハ措を畧きて
 加とつバけらとあはるべしれハ措を畧きて
 輕くかかメルとあはるべしれハ措を畧きて
 む時ハ釀と言つバ體小て重りれバ美酒乎可某とへら
 き玉美開と言ふの意ハ玉華木とへら
 火味酒三室とあらぬ理あるを思食べ味酒乎神名
 一の考は下おいふべし○三輪乃山こハ三輪の山は
 つばらるふ見乍行むものたるをばくも見さかむ

山なるものをとか、里あれば、必、三輪の山といひき
るべき處なり。畧解ぬ、三輪乃山乎と乎の辭をそへて見べしと云るはいみじきいふことあり、乎の語をそへては首尾調はむ。さて三輪の名の由縁ハ、古事記中卷
崇神天皇條小活玉依毘賣云々、答曰有麗美壯夫不知
其姓名、每夕到來、供住之間、自然懷妊、是以其父母欲知
其人、詢其女曰、以赤土散床前、以閉蘇紡麻、貫針刺其衣
襪、故如教、而且時見者、所著針麻者、自戸之鈎穴、控通而
出、唯遺麻者、三勾耳、爾即知自鈎穴出之狀、而從糸、尋行
者、至美和山、而留神社云々、故因其麻之三勾遺、而名其
地、謂美和也、と見え、るのごとし、さて飛鳥岡本、宮と

り三輪へ二里むあり、三輪より奈良へ四里餘ありて、
その間もひららあれば、奈良坂こゆる程までハ、三輪
山ハ見ゆるとそ○青丹吉ハ、枕詞なり、集中ハ甚多し、
丹吉ハ、青土黏しといふ意なり、青土ハ賦役令ハ、青土
借字、一合五勺、内匠寮式ハ、大寒日、立諸門土、偶人十二枚、土
牛十二頭料、青土二外、云々常陸國風土記久慈郡條ハ、
河内里云々、所有土色如青紺、用畫麗之俗云、阿乎爾、或
云、加支川爾と見え、り、阿乎爾ハ即青土なり、
著土ハ、爾ハ土の摠名、赤土、白土、赭埴、又八百土、ま
る、初土、中土、極土、
古事記應神天皇御歌ハ見ゆ、などもいへり、ある青

土ハ後小も源氏物語小あを小柳のかさみうつる
 の物語小春日祭の下づらへはあを小柳のさねさ
 多_ミ。即_チ青_{アヲ}土_ツの義なり。東鑑小紺青_{アヲ}丹_ニ打_ヒ水_ニ
 于_テ袴_ニ又_チ紺青_{アヲ}丹_ニ打_ヒ上_ニあども見えたり。黏_ネは字鏡小
 挺_ニ謂_フ作_ル泥_ニ物_ト也。襦_ニ也。須_スとあり。さて土_ニ黏_ネの爾_ニ襦_ニを切_ツめ
 て爾_ニといひ也。と余_ヨ小通_{カス}して阿_ア乎_ハ爾_ニ余_ヨ志_シとはいへる
 なり。神武天皇紀小天皇前_ニ年_ニ秋_ニ九月_ニ潜_シ取_リ天香山_ノ之_ニ埴_ニ
 土_ニ以_テ造_リ八_ツ十_ツ平_ツ瓮_ニ云_ク々_ニ故_ニ号_ス取_リ土_ノ處_ニ曰_ク埴_ニ安_トあるも埴_ニ
 黏_ネといふ由_ヨなるとも思_ヒ合_セべし。又夜_ヤと余_ヨと通_{カス}ふ
 は愛_{シキ}夜_ヤ志_シとも愛_{シキ}余_ヨ志_シとも云_フ類_シふて常_ニのことなり。既_ニ
 上_ニ小も夜_ヤと余_ヨと通_{カス}して袖_ニ中_ニ抄_ス小奈良坂_ノ昔_ノハ青_ニ
 いへる例_ニと擧_ゲて云_フ。さて袖_ニ中_ニ抄_ス小奈良坂_ノ昔_ノハ青_ニ

土のあまけるなり。それを取て繪かく丹ふつらひけ
 るふまかりけるなりといへるは所_{ヨリ}据_ルあまて云_フも
 のところおもはるれあれば古_ノ奈良山_ノ小は多く青_ニ
 土_ニ有_リて名_ニ産_ス小そありけむ。今_ニも畫_ス家_ノ小奈良_ノ緑_ニ青_ニとて
 但_シ今_ニ緑_ニ青_ニといふものハ土_ノ小ハあらねど自然_ノの土_ニ
 氣_ニ小て後_ニまでも奈良_ノ小ハよき緑_ニ青_ニ出_ルなるべし。十
 三_ニみ緑_ニ青_ニ吉_ニとかき醫_ニ心_ニ方_ニ小緑_ニ青_ニ和_ス名_ニ安_ニ乎_ニ仁_ニとある
 を見_ルればふるく緑_ニ青_ニとかけるハ即_チ青_ニ土_ニ小ふて其_ノハ令
 抄_ス小青_ニ土_ニ者_ト破_レ石_ト取_リ其_ノ中_ニ也。用_フ彩色_ニ也とあれば銅_ノより
 取_リるハ後_ニふてもハ石_ノ中_ニより取_リて見_ルゆ。さて齋_ノ院_ノ
 式_ノ小畫_ス祭_ニ日_ニ服_ニ并_ニ陪_ニ從_ニ女_ノ衣_ノ裳_ノ料_ニ云_ク々_ニ緑_ニ青_ニかいて眉_ノ畫_ス
 三_ニ斤_ニ十_ニ三_ニ兩_ニとある緑_ニ青_ニも其_ノふるべし。かいて眉_ノ畫_ス
 繪_ス畫_ス小は青_ニ土_ニを黏_ネして用_フふるゆゑ小其_ノ青_ニ土_ニを黏_ネも
 奈良とはつづけけるなるべし。さてあめらは阿_ア乎_ハ爾_ニ余_ヨ

須とこそいふべきと志と云るは、いひ絶て次を
 歌ふ語の一の體ふて、鯨魚等利海安見斯志大皇とつ
 づくと同格なまけり。この枕辭をべて古來詳ある
 よしハ前輩も皆よく知て信服ぬことあれば今こと
 さらふハいはむ古事記傳ふ崇神天皇の御世の故事
 ふよりて、青土と踏躰せし地と云意みつくくよ云
 り當らむの崇神天皇紀ふは踏躰草木と見え
 次み引るがごとくなるや土を踏躰せし元ハ土を
 ありだ然云バ踏躰草木とあるは漢文ふて元ハ土を
 ふみ平せしは官家と建む料の地ふむハ土を踏躰さ
 をふみ平せしは官家と建む料の地ふむハ土を踏躰さ
 もあらむ唯小御軍士の屯聚むらむハ土を踏躰さ
 むこと何の由そやあらむ久老の草木あらでは似
 ハ阿那迦斯と同言ありと云るもあへり
 能山は大和國添上郡那良より山城國相樂郡へ越る

道ふていはゆる那良坂是なり。此下ふ青丹吉平山越
 而三卷二十ふ佐保過而寧樂乃手祭爾置幣者手祭ハ
借字の
ふみて今十三ふ六緑青吉平山過而又七雖見不飽
ふみなり十三ふ六緑青吉平山過而又七雖見不飽
 猶山越而十六ふ十九奈良山乃兒手柏之十七廿廿青
 丹余之奈良夜麻須疑底泉川あり名の由縁ハ書
 紀崇神天皇卷ふ復遣大彦與和珥臣遠祖彦國葦向山
 背擊埴安彦爰以忌倉鎮坐於和珥武鏢坂上則率精兵
 進登那羅山而軍之時官軍屯聚而踏躰草木因以號其
 山曰那羅山踏躰此云布とあるがごとく○山際岡部
 氏の際の下從字を脱せるのと云るハ實不然有こと

あり然らばヤマノマユと訓べし。山際ヤマノマは十卷九小足九
 日水ヒキ之山間照ヤマノマ櫻花サクラ云々。とあるが如し。なほ際マ字マをマ
 と訓るハ、二卷十九丁九小水際ヤマノマ從三卷四十丁十小山際ヤマノマ爾伊
 佐夜サヨ登雲者トクモ又同山際ヤマノマ從出雲兒等者イッモリ又九丁十山際ヤマノマ往過
 奴禮ヌレ婆六卷十三丁三小象山際ヤマノマ乃又十八丁八島際シマノマ從又四十丁十三
 五鹿脊山際カセ爾七卷九丁九小山際ヤマノマ爾八卷十四丁四小山際ヤマノマ遠
 木末コノ乃十卷七丁七小山際ヤマノマ爾ニ罵ヒス喧ヒス而ヒス又八丁八山際ヤマノマ爾ニ雪者ユキ零管
 又同山際ヤマノマ之雪不消乎ユキハケ又九丁九山際ヤマノマ最木末コノ之十七十一丁一小
 木際コノ多知久吉タチクキふどあり。際ハ五篇ニ接チ也壁會ツ續紀ツ廿
 九廿七丁七小文部山際ヤマノマといふ人ヒト名ナもあり。さきふは四四卷四
 十十二丁二小山際ヤマノマ羽ハ

六卷三十二丁二小山際ヤマノマ葉ハ十五十一丁一小山際ヤマノマ乃波ノハとある小よりマ
 マノハとよみはありけり。マノハと異なり。○伊隱イカシ萬代マンダイ
 ハとヤマノマとの意味イカシは異なり。伊イハそへ言上コト小云コト足伊積イソクの伊イも同ト加カの言清コトて唱ナゲ
 べし。古事記下卷雄畧天皇條歌小例あり。萬代ハ何事
 小もあれ限あるをいふ。その限を過てのちハいふ小
 思ふとも見ゆべきよりのあければ。その限ハいふる
 までの委曲ウヰクツ小見つゝ行むものをとのおもふよハなり。
 その限ハとハ奈良坂の境サカイふてこゝ小則コト山際ヤマノマといへる
 それなるべし。○道限ミチノクマとハハきべて物のかくれ小ふれ
 るを限クマと云。神代紀小。今我當於百不足ヒトタラズ之八十限ヤソク將隱カケル

去者矣。限此こゝの道の曲まで此方よりハ見えぬ

處といふ。その曲限のいふく重ふれるを積どハ云な

り。○伊積流萬代爾はイツモルマテニと訓る宜し。畧

み。イサカルと訓るハ通え。あし。さて按ふ。都母流て

ふ。詞ハ堅横の差別あり。あし。へバ雪ふどの降重了。又

木、葉などの落重了。都母流と云ハ堅あり。又月日の

経行を都母流と云ハ横あり。こゝの道限伊積流とあ

るも。道の限々の経重了と云ふ。て横。爾ハ上の伊隠

あり。こゝの限々の経重了と云ふ。て横。爾ハ上の伊隠

萬代をも。この爾の辭小うけさるあり。○委曲毛。毛は

爾字の誤なり。この句爾あらでハ。下ふ。數數毛とあ

といふ毛の意。九卷。下。委曲爾示賜者。又十九。丁十一

を帶ふるなり。九卷。下。委曲爾示賜者。又十九。丁十一

ふ。都婆良可爾。今日者。久良佐禰などあり。つむらるふ

ハ。つまびらるふといふ意なり。三輪山を委曲小見む

と思ふよしあり。あとい雲ハ立覆とも。おろくハ見ゆ

べきを。さては満足ならねバ。委曲小見むことをねあ

それあるなり。○見管行武雄ハ見つゝ行むものとの

意なり。管ハ字。下。本居氏。都々ハ此をも爲あがら

彼をも爲るを云辭あり。且々の約るものといへり。

其意なり。但し且々の約りとせむハいあ。都々とい

さ。ハ異あり。且々ハ常ハ言の頭。且々云々といハ

て。尾ハ云々且々とはハは。都々ハ常ハ言の尾。ハ付

あり、字鏡小、熱、常小之婆とばかりいふと、こゝろふど

ふハ重チていへるなり。岡部氏考、一本を用ひて、

吹風有、数々、應相、物、十、三、十、丁、小、数、々、丹、不、思、人、者、續

とあるも、毛ハ、ふふといふ不とのこゝろなり、これ

も上の委曲爾を帯て、委曲小だふも云々、数々小だふ

も云々といふ意なり、心ふらひなることハかあハも

とも、せめてといふ意小、毛の辭を用ひたるなり○見

放武八萬雄は、之、サ、カ、ム、ヤ、マ、ヲと訓べし見放む山な

るものとの意なり、三、卷五、十、丁、小、去、左、爾、波、二、吾、見、之、此、

埼乎獨過者見毛左可受伎濃ハ、キ、フ、ト、リ、過、シ、バ、モ、サ、カ、カ、ズ、キ、ス、ニ、ト、訓、は、こ、ろ、ら、ら、む、

て放は遠く見やるを云、振放見ウ、リ、サ、ケ、ミるなど云るみて知べ

し、雄ハふあつなあら、志オ、モの欲ふふそれ小應カ、ナをぬきい

ふ詞なり○情無、一ヒ、キ、リ句あり、コ、ロ、ナ、クと訓べし、雲あ

心せぬよしなり、雲クモが心せざしてかくきぢゆ急小見

つゝゆあむこと小見放ミ、サ、カむこと小、かなふまどきをあ

げさるるなり、此、句より下ハ、上の三輪の山といふふ

つゞけて心得べし○雲乃、三言一句なり、此、も七言の

位の句を三言ふのまへ里、此、等の例ハ余が永言格

小委、云里、披、見、べし、畧解、情無、雲乃を、コ、ロ、ナ、ク、モ、

と、本居氏、説ふいへるよしあれども、いはり得るさる拙

き古語のあるべし、且本居氏、説のよし云る

萬葉古義上

も意得む。凡て畧解ふ本居氏、説とあて載あるふ。御形
 られぬ説どもものいと多あるハ。聞誤てあげ多るふや
 ○ 隠障倍之也カクサヤベシヤは、あくくしてあるべしやハの意なり。カ
 ク。サ。フ。ハ。カ。ク。ス。の伸あるなり。サ。フ。ハ。ス。と切れり。障
 借、字のミあり。隠し障ふる意ハ。十一ハ。奥藻オキソ隠障浪モラカクサフナミ五
 ハ。あらむ。思ひ混ふべしあらむ。百重浪ホヘタミ云々。この隠障も同じ。さてかく伸て云ハ。その
 事の緩なるときふいふことなり。隠してあるべき事
 ふハ。あらぬとといふふとの意なればなり。こハ推オスと
 オ。ソ。フ。といふと同格の詞なり。弘仁式儀、祭の詞ハ。天
 地能ツチノモクノミカミタチハ諸御神等波モクノミカミタチハ平久於太比爾伊麻佐布倍志止申と
 あるも。座イマスを伸て緩ふ云るふて同じ也ハ。也波ヤハの也ヤハ

り。もべて古言コトコト也波ヤハといふ言あり也。○歌、意ハ。奈
 のミいふも也波ヤハの意を具るれがなり。良坂こゆる程までハ。遠あむらもかへ里見しつゝ。あ
 ぐさまむとおもふ三輪山あると。かく立かくゝある
 ハ情無ココロナの雲や。かくくして有べき事ハ。あらぬと。家
 路の遠ざあると此、山ハ。頁せて。ふあく惜み賜ふなり。
 又三輪山ハ。名高くして世ふことふるハ。き山ふれ
 バ。朝夕ハ。御覧下てあぐさ。給ひし。遠ざあ里ゆく
 をとくみ給へるふも有べし。契沖。大江。嘉言。歌を引て
 の山ふれどかくれ。此、歌ハ。上おもいへることく。下。近
 行も。哀ありけり。江、國時と題し。るれば。未。近江へ遷都し。給ハぬ。前。勅。ふ

まれ私ふまれゆゑありて下らるゝとて、飛鳥ふあり
て面白く常ふ見馴し三輪山の遠さあるみよりてよ
まれも
るなり

反歌

三輪山乎。然毛隱賀。雲谷裳情。

有南畝可苦佐布倍思哉。

然毛隱賀ハ。さやうふも隠き哉の意なり。然の義ハ上
ふいへり。賀ハ哉字の意ふて歎息辭なり。今世ふさて
うふいさきつり隠き。清て唱べし。賀の濁音の字を
哉といふ可如し。清て唱べし。賀の濁音の字を
くそともをまじくハ雲間もあるべきふさてくつらき
かくしやうかなとおもふ心を。此歎の辭ふるせ
り。○雲谷裳谷ハ借字なり。俗ふ雲なりともといはむ
のごとし。雲なりともせめて心あれとの意なり。○情
有南畝。情字類聚抄ハ心畝字。官本ハ武と作り。字彙ハ
謀叛ふといふハ。いゝで心あれしと希望ふ意なり。
長歌ふハ。雲の情ふきをうらみくるのこをいひ。反歌

あり。その雲だも情あらむことをねがえれとるあ
 り。己が心の布とを雲のおしそを里て。あえれまざる
 を婦のくなげられあるなり。○可カ苦ク佐サ布フ倍ベ思シ哉ヤハ長
 歌あると同ジ○歌意長歌ふハ雲の情あきをうらみ
 その雲なりとも情ありて。かくまでとくむ三輪山を
 るを。いっでつまびらるあ見せよ。といひて。今ひ
 ときは切なる心を迷られあり。古今集小。貫之。三輪
山を然も隠き。春霞人ふ知られぬ花哉。開らむとあるハ此。歌をとりにてよめり。
 右二首歌。山上憶良大夫類
 聚歌林曰。遷都近江國時御

覽三輪山御歌焉。日本書紀
 曰。六年丙寅春三月辛酉朔
 己卯遷都
 于近江

山上云々。例よるふ山上の上。檢字を脱せし。○焉
 字類聚抄ふあり。拾穂本ふは也と作り○この類聚歌
 林ふ依ときハ。天智天皇の大御歌の。又ハ大海皇子尊
 天武の御歌なるべし。○紀字。舊本誤て記と作り○己
 字類聚抄ふ乙
 と作里誤なり

井戸王即和歌

井戸王の考ふるものあり。後世大和國の武士小井戸若

井戸王ハ考ふるものあり。後世大和國の武士小井戸若
狹守覺弘と云人あり由ある
の。但しこの井戸氏ハ武藏國秩父郡井戸村より出るとも云り。はと和歌とあるも既
く左注不疑いおきあるごとく

いあぶおほゆ。猶能考べし

綜麻形乃林始乃狹野榛能衣

爾著成目爾都久和我勢

綜麻形は地名なるべし。崇神天皇紀小大綜麻杵と云

人名あり由ある。形ハ左野方山縣ふと地名小多し

その縣あるべき。按ふ此ハ三輪山の古の異名なる

べき。上ふ云るごとく閉蘇麻の三勾遺れるふ。因て

其地を美和と名けさるより見えさる。閉蘇ハ即綜麻

ふて其麻の遺れる状ふよりて三輪といひをめさる

地名あるふゆふ。やて綜麻形といひさるある

べし。さて彼地の異名なりける。本名の三輪と云

るのみせふひろく傳をりて綜麻形の稱ハ後ふべき

てえぬことなれるふやあらむ。紗麻形の誤といふ

○林始林は名義榮なり。夜志の切例とある。和名抄に
談岐國阿野郡林田波以多と
 あり竹樹の殖て茂榮多る謂なり。武庫の枕詞小玉波夜
 須といふも玉映といふ意の伸至る稱なるを考合
 べし。のくて波夜志てふことは出雲國風土記小意宗
 郡拜志郷云々吾御心之波夜志詔故云林云々書紀顯
 宗天皇卷室壽大御辭小取舉棟梁者此家長御心之林
 也など見えてそのもとハ心意ふま礼品物ふま礼一
 物の數多く榮え繁るをいふ稱あるの。後ふハ竹樹の
 うへハのこ云ことハ如くなれるなり。五卷十六十四
 丁四小波也之同卷三十或本歌小平波夜之ふど假字書

も見えてみな竹木の林なり。林字を書さるハ更なり。
 志あるを岡部氏考ふ。林をシゲキと訓ある。その繁木
 ありて大被祝詞も見えてこれバさることあり。あはれど
 集の例を考ふるも。一シゲキと訓べきあらば。林字ハ
 ありぬことあり。集ハ集の例よりて訓こそ要と
 あり。げハ事あり。尚熱心て見ると。謾ハ訓るハ。理あ
 り。多あり。さるハ。江卷三十四丁。小冬乃林七卷三丁。小
 星之林又廿九丁。江林十卷廿丁。小橋之林十九四十七
 丁。小竹林。あど何處ありて。林字ハ。ハヤシと。始は契沖
 訓るありて。シゲキあらぬことあり。始は契沖
 のサキとよめるふよるべし。上小引さる古事記小伊
 夜佐岐陀豆流とあるも。始ふ立るをいへバ。始をサキ
 と訓ハ理あるべし。さて始ハこハ岬なり。○狹野榛
 ハ。狹は真小通ふ美稱ありて。野榛とのみいふも同じ古

事記小佐怒都登理岐藝斯とあるを。此集ふは野鳥雉

とあるみて意得べし。かくて此物は和名抄小本草云

王孫一名黄孫和名沼波利久佐。此間云豆知波利字鏡

ふ。藥豆知波利など見えある物ふて。波里といふ名義

こそい同じあらめ。木類の榛とは別種なるべし。七卷

十三 小吾屋前爾生土針從心毛不想人之衣爾須良由

奈十六 小墨之江之岸之野榛丹。野の二字。舊本小

田氏の考。丹穂所經跡丹穂葉寐我八丹穂水而將居。ふ

小依り。丹穂所經跡丹穂葉寐我八丹穂水而將居。ふ

とある皆同種なるべし。榛は野ふも生る物ふれば。野

れど。さらば野之榛とは云べき理ふれども。たふ野

種と見えあれは。いよ。榛とは別あるをさとするべし。

或人ふの。此説を見て云。榛は野ふも山ふも生るも

抄ふ。曾良之とあるを。字鏡ふ。乃。曾良自とあるを。お

野。曾良自といへ。れど。此考はありけり。曾良自と

鏡。小。菽。ま。さ。艾。を。曾。良。自。と。し。蒿。菴。ま。と。菽。契。き。乃。曾。良。自。と

自。と。せ。る。み。て。も。さ。と。る。べ。し。も。同。種。ふ。ら。む。ふ。は。あ

曾。良。之。と。あ。る。を。字。鏡。ふ。乃。曾。良。自。と。あ。れ。ど。彼。書。ど。も

の。ふ。ら。ひ。ふ。て。あ。な。お。ち。ふ。字。猶。こ。の。草。の。こ。と。品。物。解

を。バ。と。の。む。べ。き。み。あ。ら。む。著。成。ハ。如。著。と。い。ふ。お

ふ。も。い。は。む。を。む。お。へ。見。べ。し。○。著。成。ハ。如。著。と。い。ふ。お

如。成。は。借。字。如。なり。那。須。は。期。登。久。と。い。ふ。意。の。古。語

但舊云々已下と。拾穂本亦然依舊本以載茲と作り○
 按ふ。この左注のうらぶひいさることなり。或説ふハ。
 右の味酒云々の歌の端詞を。井戸王下近江國時作歌。
 額田王即和歌と改めて。あの長歌反歌ハ。井戸王の額
 田王と比さる歌と。綜麻形の云々の歌ハ和我勢と
 あるあらハ。額田王の和歌として。井戸王をさしての
 うまへりとせり。それも理ありげなれど。なる右の長
 歌反歌ハ。舊本の如く額田王のなるべしこそ思ハる
 れ。されバこれハ
 鑿説なるべし。

スメラミコトノミカリシタマヘルカマフヌニトキスカタノオホキミノ
天皇遊獵蒲生野時額田王

ヨミクマヘルウタ
作歌

遊獵獵字類聚抄此の年月は左注ハ書紀を引多るこ
 とく。天智天皇七年五月五日なり。夏の獵ハ獸と獵ふ
 り。歌の左ハ委く注レきべし。○蒲

生野は近江國蒲生郡の野あり

アカ子サスムラサキヌユキシメヌユキヌ
茜草指武良前野逝標野行野

守者不見哉君之袖布流。

茜草指は紫といはむるめの枕詞なり。日とつゞくる
小同。紫へ今の紫ふあらむ。人のいとゆる朱と
奪ふ紫のことなり。集中小人の紅顔を紫ふとへる
る歌多きふておもふべし。二卷 廿八 小 茜刺日者 雖照
有まゝる 三十 茜指日之入去者 茜指と且獲 又 三十 赤根
刺日之盡六卷 十一 小 茜刺日不並二十三 一 小 赤根
刺日者之彌良爾十五 一 小 安可彌佐須比流波毛能
母比四卷 二十 小 赤根指照有月夜爾十一 一 小 赤根刺

所光月夜爾十六 廿四 小 赤根佐須君之情志續後紀十
九興福寺僧長歌小 茜刺志天照國乃ふとあり。按小 赤
根の根はふだふそへる言ふて。赤指といふなるべ
し。物は異ふれど。島根草根眉根ふと云と同く。根の
言ふ意ふし。指へ篝火指ふどの指ふて。光曜ことあり。
又日光の指。月影の指などいふ指も同く。或説ふ。赤丹
るは誤なり。又冠 〇武良前野逝は。紫草の生る野を行
辭考の説も非し。の謂ふて。紫野といふ地。名ふあらむ。〇標野行 標字
標ふ誤。類聚 是遊獵。賜はむ料ふ。標おるせまへる
抄ふ從つ。野を行ふ。このふとつ。の逝行ハ。下の君之袖布流と

いふふつゞけて心得べし。野守といふへつゞけるふ
 へあらざり。野守者不見哉。野守といふ。今俗いふ野
 番なり。御遊獵賜ふ野へハ。守護人を居置て。私小狩
 獵をること禁められしなり。持統天皇紀。小朱鳥四
 年八月辛巳朔丙申。禁斷漁獵於攝津國武庫海一千步
 内。紀伊國阿提郡那耆野二萬頃。置守護人とあるをも
 思ふべし。さてこゝハ。額田王ふつきさる警衛の者を野
 守ふるとへて云なる下ふ云べし。さて武良前野。標野。
 野守の野ハ。皆努と訓べし。畧解云。野を集中奴と假字
 野を美延斯努おど書多れば。野ハ。元て奴との訓べ
 けれども。五。卷。小。波。流。能。能。爾。十。八。ハ。夏。能。能。之。十。四。小。

須我能安良能ふともあれ。調ふよ。至て。稀小は能と
 行野守者不見哉。おど云。御歌の野と。奴とは。唱へ。あ
 けれ。バ。これ。は。乃。と。せ。り。猶。此。類。あり。と。云。る。ハ。意。得
 る。こ。と。あり。ま。づ。調。ふ。よ。り。て。ま。れ。ふ。は。能。と。も。よ。み。さ
 り。と。思。へ。る。こ。と。要。奴。由。伎。頑。思。ふ。れ。さ。る。所。由。あ。ら。む。ふ。ハ。
 集。中。の。夜。麻。古。要。奴。由。伎。頑。思。ふ。れ。さ。る。所。由。あ。ら。む。ふ。ハ。
 能。美。夜。と。奴。蔽。と。波。流。能。努。須。我。能。安。良。能。と。は。須。我。能。安。
 良。努。夏。乃。能。を。夏。の。奴。と。い。は。む。畧。解。の。あ。る。き。こ。と。の
 ある。べ。く。も。あ。ら。ず。是。小。て。も。畧。解。の。あ。る。き。こ。と。あ。ら。む。
 う。つ。あ。け。れ。バ。お。の。考。を。あ。げ。て。さ。ら。ふ。こ。と。あ。ら。む。
 そ。も。く。古。は。ま。べ。て。野。を。努。と。い。ふ。の。み。あ。ら。む。小。竹。を
 志。奴。凌。を。志。奴。具。偲。を。志。奴。布。樂。を。多。奴。斯。お。ど。云。て。奴
 といふ。べ。き。を。能。と。い。へ。る。こ。と。ハ。曾。て。あ。り。し。を。奈
 良。朝。の。比。よ。里。あ。つ。ぐ。奴。と。能。と。い。ひ。と。め。し。と。見。え。て。

集中小も五卷十七小波流能能爾とあるとははめて

十七十七小志乃備十八小多能之氣久又夏能十九

能之廿卷十四能乎之乃布良之かど見えあり

四丁小須我能安良能爾又十二丁可美都氣乃とある

ハ東語ハ須我能安良能爾又十二丁可美都氣乃とある

説ふ可美都氣乃の乃字ハ奴の誤ありべし凡て此國

名をよめる歌十二首ある中小乃といへるハ只一小

て餘ハみふ奴ありるをかくて又十八丁小多流比賣野

思ふべしといへりをかくて又十八丁小多流比賣野

宇良乎許藝都追又九奈良野和藝敝乎又安利蘇野米

具利又十伊都波多野佐加爾蘇泥布禮又二十須久奈

此古奈野神代欲里廿卷十五小安伎野波疑波良ふど

野字を之の意の假字小せるをおもへバヤ奈良朝

の季つあふよりは野を能といふことハふれりけ

むされど猶あり今京より以後ハ野を能と假字書小せるも

と云ふことハ絶てあきごとハあれどもあまく土左日

記ふ阿波の野島と奴之麻とハ書ることハあり

しかれば近江朝の比小は野を能といひ一ことハあ

どハあつても無きことハその一されバ一二卷ハは

ふどもハ奴といふべきを能と書る例ナ然るを調

ふよハて能といふべきを能と書る例ナ然るを調

中ハも時代の差別ありあればハかのハその時代の語ハつ

きて考ふべき事ありるを大ハるハ意得をるこそいと

けれ哉ハ也波の也あり〇君之袖布流君ハ皇太子

るべきやうなり。されば思ふ小六卷廿三丁。大伴卿の
 娘子のよ小凡者左毛右毛將為乎恐跡振痛袖乎忍而京小上られし時
 める歌ルカモこれハ人からハ袖振てさし拓むを貴人ふ
 有香聞レバカこれハ人からハ袖振てさし拓むを貴人ふ
 云意なり。十二四丁小八十ハカカシマカリナ梶懸島隱去者吾妹兒之留ガト
 思合ト合ハベ登將振袖不所見可聞トフラムソテなどあるごとく離別のときハ
 さらふて人を招く形容をきべていへるなり。領巾ふ
 るといふも同じ。さればこゝハけそりして袖ふりさ
 しまねくさまを云るふるべし。○歌意は中山嚴水畧
 小外ふよそへもる意ふしといへるハ皇太子の禁野解
 き犯し賜ふを額田王の禁賜ふ意と心得ふるふや
 もしさる意ふらむは袖布流てふ詞こハ然サをあり
 らふべくもあらざられふもふか

小左ゆき右ゆき吾を招きて懸想ケソウの容貞サマを勿ナシ為賜シひ
 そ吾方の警衛ウケウチの者等の見とらめむ小と恐憚オソヒ呈て作
 て奉らせ賜ふなり。御答歌ふておのづの
 らその意徴シズメといへり。實マコトふさも有べし

皇太子答御歌 明日香宮 御宇天皇

皇太子ハ大海人皇子小て天武天皇ふり。御傳下小い
 ふべし。○明日香宮ハ明日香清御原宮なり。類聚抄古
 謚曰天武天皇と云注あり。さてこの天皇皇年代略

記小推古帝三十一年癸未降誕。天智帝七年戊辰二
 月戊寅為皇太弟云々とあり。かくてこの遊獵ハ
 即天智天皇七年ふれば四十六歳の御時なり

紫草能爾保敝類妹乎。爾苦久

有者。人孀故爾。吾戀目八方。

紫草能とは右カラサキ紫野遊カラサキニキとあるをうけて。則チあゝ語て。艶有ニホといはむ料の枕詞と爲給へり。○爾保敝類妹乎ニホヘルイモヲとは。爾保敝類ニホヘルハ艶ニホひて有なり。爾保布ニホフとハ紅顔ニホホオモの光澤カリあるをいへる。あて。上小引さる十六小。赤根佐須君とある小同。香カ小のこふるふといふハ後のこと小で。古コハもをら色のりへふにるふといへり。三卷一五丁

小茵花香君之十三丁廿三。小茵花香未通女オシホトメふどあるもぐいふ耳。妹乎イモヲとハ妹イモあるものをの意なり。下の吾戀目アレモ八方ヤハチといふふつゞけて意得べし。爾苦久有者ニククアラバといふ小直小續ける小ハあらざ。さてこハ額田王をさして妹との賜へるふり。○爾苦久有者ニククアラバとハ。悪くハ愛くウケルの反對サシふて。愛く思へばこそ。かくこりなく戀るふれも。悪くハさもあるまじきをとの御意なり。十卷丁四廿。小吾社葉憎毛有目吾屋前之花オシハコシ橘乎見爾波不來鳥屋ヤ。○人孀故爾ヒトヅマニハ人孀ヒトヅマあるものをの意なり。人孀ヒトヅマとハ。もと他人の妻をいふことふれど。まこと小人の妻オシふ

限らず。他小心をのよそして、これあつらきといふ詞
なり。額田王ハ、天智天皇の妃なれば、實小人妻との
まをむふまをねども、あつらさうあてゝのまふべ
くもあらねば、あつらふこれあつらきをうらこ
て、人妻といのまへるなるべし。○吾戀目八方ハ、あ
をれ吾かく戀む車といふ意なり。目ハ牟のかよ
へるなり。ハハ也波の也。方ハ歎息辭なり。○御歌の意
は、もとそこを悪く思はば、人妻あるを知あつら、かく
こりかく戀まじき物を、大のあふ愛く思をねばこ
そ、袖振ふと懸想ハもふれといふ御意あるべし。

紀曰。天皇七年丁卯夏五
月五日。縱獵於蒲生野。于時
大皇弟諸王内臣
及群臣皆悉從焉。

紀ハ、天智天皇紀なり。○丁卯ハ誤なり。戊辰ハ改むべ
し。大神景井云、畧解ハ、天智天皇七年ハ戊辰あり。六年
の誤ありと云るハ、季ハあらざ、則チ書紀を見るハ、七
年ハ丁卯ハ誤りしものあり。○縱獵、縱、字、書紀ハ、
皇の二字有べし。推古天皇紀ハ、十九年夏五月五日、藥
獵於兔田野云々。二十年夏五月五日、藥獵之。集于羽田
云々。二十二年夏五月五日、藥獵也。これら同日なれば、

この縦獵ハ藥獵と知れり。藥獵トハ鹿茸を取らぬ
 なり。和名抄藥部小鹿茸鹿角初生也。和名鹿乃和加豆
 乃とあり。さてまづハ五月五日を主とせしむることおれ
 ど。四五月の間ハとる事とおもて。十六丁三十一四
 月與五月間爾藥獵仕流時爾云々とよみ。十七丁十二小
 加吉都播多衣爾須里都氣麻須良雄乃服會比獵須流
 月者伎爾家里と家持卿のよまれり。四月五日お
 り。○大字舊本天小誤れり。元曆本小ま里つ○皆悉皆
 字拾穗本小なり。

悉、字元曆本小无

16
125
96

